
月色ラブソディ

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月色ラブソディ

【Nコード】

N3792X

【作者名】

灯里

【あらすじ】

結末なんて最初から分かった恋だった。それでも……。

中々素直になれない魔王フェリシアと腹黒神族リュシアンに愉快な魔王城の面々が紡ぐ物語。

『この腹黒神族！ 半径三メートル以内に近寄るなっ！』

腹黒神族×ツンデレ魔王のラブコメディ。時々シリ阿斯。※HPでも公開しています。

登場人物紹介

▽フェリシア

主人公。愛称はフェリシィ。フルネームはフェリシアⅡレグラメントⅡラインフォルト。

薄紅色の髪と孔雀色の瞳を持つ魔族の少女。第二十四代魔王。

七大貴族の一つ、魔のレグラメント家の出身。歴代魔王の中でも随一と謳われる魔力の持ち主だが、運動神経は今ひとつ。しかしながら魔術には身体強化のものがあるため、実際はそれほど悪くはない。

王としては未熟な所も多いが、民を想う気持ちは強い。リュシアンのことは鬱陶しいと言いつつも、満更でもない様子？

背に黒曜石を思わせる蝶に似た艶やかな翼を持つ種族であり、普段は隠している。

▽リュシアン

愛称はシアン。神出鬼没の神族の青年。何かとフェリシアにちょっかいを出す。黙っていれば超絶美形だが、口が悪いため、残念美形と称されることもしばしば。

白金色の髪と月色の瞳を持つ。外見年齢は二十歳前後。フェリシア曰く、リュシアンという名は偽名らしい。

神族にしては好戦的で、売られた喧嘩は必ず買う。しかも基本は十倍返しと容赦がない。神術、武術共に申し分ない実力の持ち主で、フェリシアのこともあり、ジュリアやローには警戒されている。

▽ジュリア

城のメイド長にしてフェリシア至上主義者。夢魔族。優しげな物腰だが実は腹黒。さらりと怖いことを言う。軽くウェーブがかかった薄い金髪に、ライトグリーンの瞳。リュシアンとは犬猿の仲。

体術、魔術共に凄まじい実力を誇る。有能な人物ではあるが、隙あらばフェリシアの素晴らしさを世界中に伝えようとしているちょっとズレた美女。

▽アリスティド

愛称はアリス。フェリシアの補佐をつとめる青年。軍師でもあり、頭は良い上に実力もあるがややヘタレ。そのため本来の実力を出しきれないことも……。

ジュリアとは幼馴染。その愛称と容姿からよく女性に間違えられる。フロステイブルーの髪、琥珀色の瞳。特技は料理。濃すぎる面々に苦勞が絶えず、魔族ではあるがリュシアンに好意的。

▽エヴァンジェリン

愛称はエヴァ。血を溢したようなルビーレッドの髪に、薔薇色の瞳。長い時を生きる偉大なる大吸血鬼。七大貴族の一つ、惑のアルカード家の前当主。外見は十四、五歳前後。年増、おぼさん、または若作りと呼ばれるとキレる。

当主を退いた今は、自由気ままに宮廷魔術士をしている。

レースのようにヒラヒラした服が好き。敬意と畏怖を込めて『鮮血を纏いし夜の女王』の二つ名で呼ばれる。

▽クロウ

愛称はクロ。黒髪に藍色の瞳。右目に包帯を巻いている。魔王城の台所を取り仕切る料理長。鴉族の少年。

光り物が好き。外見は十六歳くらい。毒物マニアの暗器マニア。気分によって料理を作るため、とんでもない料理を出すことも。いつも眠そう、無口、無表情と三拍子揃っている。昼行灯を気取っているが、実は隠密で戦闘能力は非常に高い。本来は八咫鳥と呼ばれる存在である。

▽ローウエル

人狼族の青年。愛称はロー。スチールブルーの瞳に、長い銀の髪を三つ編みにして肩に垂らしている。

騎士団の団長を務めており、剣の腕は国一番と称されるほど。

リュシアンとセエレを毛嫌いしている。

研ぎ澄まされた氷のような美貌とその言動からクールに見えるが、実はあがり性で人見知りなだけ。部下たちには厳しいが、慕われている。

▽セエレ

人族の青年。ブラウンの髪、紫の瞳。自称勇者で魔王を倒すべく魔王城に乗り込んで来たが、フェリシアに一目惚れをして即断念。勝手に魔王城に居座る。

フェリシアの愛の奴隷（自称）。顔だけはいいたため、魔王城でもそれなり？に可愛いがられている。色々とぶっ飛んだ人物。毎回リュシアンにボコボコにされるが全く堪えていない。

生命力はゴキブリ並で、しつこさに関しては定評あり。愛犬エクスカリバーンを連れている。

創世神話

この世界、アリア・アースヘルヴは神々の歌より生まれたとされている。対であり、互いに半身である二柱の神。

――神竜王グランミュリン。世界を創造した神の一柱。秩序や安定、安寧、昼を司る慈悲深き神。

――魔竜王ラインハルト。世界を創造した神の一柱。混沌や変化、混乱、夜を司る雄々しき神。

彼らは元々一つだった。一つであつた時とは違い、別たれてしまえばグランミュリンもラインハルトも互いの心が分からず、すれ違ふばかりだった。

いつしか彼らは争うようになった。己の存在意義をかけて。互いが憎かった訳ではない。

愛しているからこそ、神々は争い続けた。互いを分かろうと。元は一つであつた神々は言葉を交わすことを知らなかった。戦うことでしか互いを理解出来なかったのだ。

そしてある時、彼らは己の分身たる存在を作り出した。グランミュリンは眷属として神族を、ラインハルトは魔族を。そして力なき人の子を。

神族。其は光と秩序より生まれしもの。神なる竜より生まれし存在。

魔族。其は夜と混沌より生まれしもの。魔なる竜より生まれし存在。

人族。其は光と闇より生まれしもの。神と魔なる竜より生を与えられし存在。

神々が眠りについた後、いつしか彼らは争うようになった。互いを理解するためではない、憎しみをもって。どれほど時が経とうとも変わらず、憎み合う彼らを見て、神々は何を思うだろう？

悲しみに暮れて歌い続けるか、それとも何もかもをやり直すのか。全ては神のみぞ知る。

とある魔王城の日常

燦々と照りつける太陽に、どこまでも澄み渡る空。今日も平和である。

贅の限りが尽くされた一室に一人の少女の姿があった。アンティークドールのように愛らしい顔立ちをしている。腰まで届く髪は淡い薄紅色で、透き通るような肌はまるで陶磁器のよう。

膝よりも短い黒のスカートに、金糸で刺繍が施された黒の外套は、人形のように愛らしい少女には不似合いかもしれない。

彼女は長い睫毛に縁どられた孔雀色の瞳を細め、目の前の紙切れを睨みつけている。

少女――フェリシアは、執務机に山積みになされた書類と戦いながら、ペンを走らせていた。最近、あの目障りな“あれ”も発生していないし、フェリシアはご機嫌だ。

あれ、が何であるか今は語らないでおこう。

「平和って素晴らしい！」

フェリシアは思わず持っていた羽根ペンを放り投げる。

魔竜王ラインハルトより生まれた魔族であるフェリシアが言う台詞ではないが、思わず叫びたくなった心情を察して欲しい。

「天下の魔王陛下が平和を喜んでどうするんですか？」

と唐突に聞こえてきた美声に、フェリシアは無意識に椅子から立ち上がり、後ずさった。

しかしその瞬間、電光石火の早業で手を掴まれる。振りほどく暇もない。

フェリシアが呆然とする中、彼女の白い手に唇が落とされる。長い睫毛に縁取られた月色の瞳を閉じ、唇を寄せているのは息を呑むほどに美しい青年だった。

纏う白い服と相まってまるで、光の化身のよう。無造作に束ねられ、左肩に流された艶やかな長い髪は白金で、銀糸よりも煌めいている。肌は抜けるように白く、一点の染みもない。

何よりも見るものを圧倒するのはその顔立ちだ。美しい、その言葉さえ陳腐に思えるほどの凜とした美貌の持ち主である。

見慣れているはずのフェリシアでさえ、見とれてしまうほどに。青年に見とれていたフェリシアはそこではた、と我に返って叫ぶ。

「こ、この腹黒神族！」

叫んだ瞬間、突然巻き起こった突風が青年を襲う。だが風が青年に届くその瞬間、見えない壁に阻まれ霧散した。鎌鼬もかくやというほどの突風も青年の前髪を揺らしただけ。

「おやおや、久方ぶりの再会だと言うのに、酷いですね」

「フェリシア様から離れなさい、この疫病神。はあ！」

青年がぐすりと笑った瞬間、扉を開けて飛び込んで来た女が青年に向かって貫手を繰り出す。

青年はと言えばその美しい顔に微笑を浮かべて女の攻撃をかわしていた。まるで軽業を見ているよう。

「あの……貴女もいい加減止めませんか？」

「あら？ わたくしがお相手だと物足りませんか？ 忌々しいリュシアン殿」

苦笑しながら攻撃を避ける青年——リュシアンに女はにこりと笑って攻撃を続ける。

その女性もリュシアン同様、人ならざる美貌の持ち主だった。

緩やかに波打つ金色の髪は金糸のように輝いているし、ライトグリーン瞳は磨き上げられた宝石よりも美しい。すらりと伸びた肢体、括れた腰と豊かな胸を隠すようにエプロンドレスを身に付けている。

「あーあー……、また始まった。あの、ジュリア。おい！ なんであたしがこんなこと……炎よ、揺らめけ。後は適当に」

一人取り残される形になったフェリシアは呆れたように女性——ジュリアの名を呼ぶが、彼女の耳には入っていない。ジュリアは鬼気迫る笑顔でリュシアンと攻防を続けていた。

フェリシアがため息をついた直後、炎が弾け、凄まじい爆風と熱が二人を襲う。

しかしリュシアンもジュリアも火傷すら負っていないし、部屋にも焼け焦げた跡などない。

「嗚呼、魔竜王様お教え下さい。何故、あたしがこんな目に合わないければならないのですか。立派とはまだ言えませんが、自分なりに力を尽くしているつもりです。何故、何故、こんな腹黒神族とかかわり合いにならないといけないのです！」

「運命と思って諦めてください」

『いっぺん死ね！』

魔竜王に懺悔を始めるフェリシアを見て、リュシアンは甘く笑う。運命だと笑う彼に思わずぐらつきながら、フェリシアとジュリアは舌打ちをして叫んだ。

しかし二人の殺意溢れる言葉にも、リュシアンは楽しげに笑うだけだった。

騒がしい人たち

「折角の再会だというのに、随分なお出迎えですね」

「それは貴様がジュリアを挑発するからじゃろう。まったく、呆れて言葉も出んわ」

苦笑するリュシアンの声に、呆れたような声が返ってくる。声の主はフェリシアでもジュリアでもない、もっと若い少女の声だった。振り向いた先、扉に持たれかかるように誰かが立っている。フェリシアより年は三、四歳ほど下、十四、五歳ほどだろうか。

白い肌は陶磁器のように滑らかで、一点のしみもない。艶やかに波打つ長い髪は血のように赤く、薔薇よりも鮮やかで、アーモンド型の瞳はピンクローズを思わせる美しい薄紅色。

アンティークドールのように整った愛らしい顔立ちをしているが、人を惑わせる魔性を秘めている。

銀糸、金糸の刺繍が施された厳めしい外套は夜の闇を思わせる漆黒だったが、その下から覗く服はレースとリボンがふんだんに使われたものだった。

「貴様も懲りぬのう。わらわも呆れてものも言えんわ」

「貴女には言われたくないですね。お年寄りには引っ込んでいて下さい。エヴァンジェリン殿」

やれやれ、と肩を竦める少女に、リュシアンは意地の悪い笑みを浮かべる。明らかな挑発に、エヴァンジェリンと呼ばれた彼女の頬がひきつった。

そこへリュシアンが輝くばかりの笑顔で、態とらしくとどめの一言を放つ。

「おや、失礼。御老体にはもう少し大きな声で話した方がよろしかったですか？」

「リュシアン」

フェリシアがたしなめるように名を呼んでも、リュシアンは肩を竦めるだけで悪びれる様子などない。ご老体。明らかな挑発である。恐る恐る振り返ると、案の定、怒りに顔を染めたエヴァンジェリンがいた。

こうなったエヴァンジェリンを止めるのは簡単ではない。彼女の薔薇色の瞳は怒りに染まっている。

「小僧、わらわを老人呼ばわりとは随分、死に急ぎたいようじゃの」

「まさか。貴女を敵に回すほど私は愚かではありませんよ」

「ほざけ」

無駄だと判断したフェリシアは、無視を決め込むことにする。その隣ではジュリアが優雅にお茶の用意をしていた。エヴァンジェリンから殺気が溢れても、リュシアンは笑みを崩そうとはしない。

可憐な少女の姿をしているが、彼女のフルネームはエヴァンジェリン＝アルカード。七大貴族の一つ、惑のアルカード家の前当主であり、『鮮血を纏いし夜の女王』の二つ名で呼ばれる偉大なる大吸血鬼である。

こう見えてこの中で誰よりも年上な彼女に表立って逆らえる者はそういない。

「やっぱり、クロが作ったお菓子とジュリアがいれるお茶は美味しい」

「恐れ入ります。クロも喜びますよ」

一方、フェリシアはジュリアが用意してくれたティーカップを傾け、マカロンをつまんでいる。迷惑な限りだが、神出鬼没のリュシアンのお陰で最近の魔王城ではこんな喧嘩など日常茶飯事なのだ。彼が何者かなんてフェリシアは知らない。知っているのは彼が神族であることと、自分に興味があることだけ。

リュシアンという名も偽名だろう。リュシアンが魔王城に現れるようになったのは、今から一年ほど前のことだ。

「陛下、止めなくてよろしいのです？ アリスが見れば卒倒しますよ」

傍に控えていたジュリアが微笑を浮かべながら尋ねる。

しかし彼女が二人を心配しているからという訳でもなく、ただ騒がしくていいのかというフェリシアへの気遣いだ。

二人が優雅にお茶を楽しんでいる間も、リュシアンとエヴァンジェリンはやり合っている。リュシアンは相変わらず微笑みながら、エヴァンジェリンはこめかみに青筋を浮き立たせ、罵詈雑言の応酬。一見二人はただ向かい合っているようにしか見えないのだが、二人の間で恐るべき神力と魔力がせめぎ合っている。何も見えないのは二つの力が相殺され続けているからだ。

「やらせておけばいい。頭に血がのぼっているエヴァはともかく、リュシアンは引き際を弁えているだろうから」

「それは本人の前でおっしゃらない方が宜しいかと。……調子に乗りますから」

エヴァンジェリンは長い時を生きてはいるが、侮辱されることには慣れていない。それはそうだ。前アルカード家の当主で、偉大なる大吸血鬼に正面きって喧嘩を売るのは自殺行為である。フェリシアとしては彼を褒めた訳ではなかったが、とてつもなくジュリアの笑顔が怖い。

いいですね、と念を押され、フェリシアは無言で頷くしかなかった。

「……陛下、これはどうされたのでしょうか？」

恐る恐る執務室に入って来たのは麗人である。美しい琥珀の瞳に、長いフロステイブルの髪は絹糸のように背中を流れていた。

抜けるように白い肌にすらりと伸びた肢体。裾や袖口が長く、ゆったりとした白い衣を纏っている。年の頃はジュリアと同じくらいだろう。

フェリシアを陛下、と呼んだことから魔族なのだろうが、清廉な美貌といい、纏う衣といい神竜王に仕える聖職者のようだ。

「あら、アリス。来てしまったのね」

「ジュリア……。また、ですか」

アリス、と呼ばれた人物は、部屋の中でやり合う二人を見て深いため息をついた。憂いを帯びた表情といい、実に麗しいのだが、何故だかなり疲れたような雰囲気漂っている。

だがジュリアはそんな『アリス』を一瞥しながらあっけらかんと言いつつ。

「一応、実害はないから放っているんだけど」

「陛下の執務の邪魔になっていると思いますが……」

どこからどう見ても女性にしか見えないが、彼女ではなく、彼である。彼を見た者はまず間違いなく、女性というだろう。柔らかな物腰といい、麗しい容貌といい。

本来の名はアリスティド。こう見えてれっきとした男であり、フェリシアの補佐をつとめる非常に優秀な青年である。

「ジュリアがいながらこの有様ですか……」

「あら？ 不毛な争いを止めるほど、私は馬鹿ではないわよ。それより、アリス。あなたも一緒にどう？」

ふう、と深いため息をついて頭に手を当てるアリスティドに、ジュリアはのほほんと言う。ジュリアとフェリシアは二人などそっこのけでお茶を楽しんでいるではないか。

彼女の言う通り、彼らの争いを止めても数分後にはもう再開されるのだから意味が無い。つまりは不毛だ。

しかし、だからと言って魔王陛下の執務室で私闘をされては困るというもの。

だが肝心のフェリシアは止める気もないようで、ジュリアも同様だ。そうなればアリスティドが止めるしかない。

「残念ですがお断りします。先にリュシアン様とエヴァンジェリン様を止めなければなりませんので」

「アリス。リュシアンに様付けなんてしなくていいの」

ティーカップを持ったフェリシアが眉間に皺を寄せている。リュシアンは神族で当然、魔族との仲は悪い。天敵と言っても過言ではない相手に様付けは不要だということだ。

しかしながらこれは意図したことではない。何せ、アリスティドの癖である。

「……申し訳ありません。癖のようなものですから」

頭を垂れてリュシアンとエヴァンジェリンに向き直る。相手はアルカード家の前当主と神族の青年。アリスティドも七大貴族——智のファリエール家の出ではあるが、流石に『鮮血を纏いし夜の女王』の間に割って入るのは色んな意味で勇気がいる。

けれども敬愛する魔王陛下がしないのなら、二人を止めるのは補佐であるアリスティドの役目だ。

「お二人ともそれくらいにして下さい。——魔の力よ、私に従いなさい」

歌うようにアリスティドが言葉を紡いだ瞬間、リュシアンとエヴァンジェリンの動きが止まる。不可視の魔力の鎖が二人を縛めているのだ。

いくら彼らが互いしか眼中になかったとは言え、こうも簡単に二人を拘束する彼も只者ではない。普段はその柔らかな物腰と自信のない態度に隠れているが、アリスティドは非常に優秀である。フェリシアの補佐としても、魔術の使い手としても。

「まあ、今日はアリスに免じて許してやろう」

「奇遇ですね、私もです」

背筋が凍るほどの冷笑を浮かべて、エヴァンジェリンとリュシアンは同時に肩から力を抜いた。今ではリュシアンを止めるのは殆どアリスティドの役目である。

やっと大人げない喧嘩をやめた二人に、アリスティドは本日何度目になるか分からないため息をついた。

銘菓『魔王饅頭』

「それで、アリスは何をしに來たのじゃ。まだお主がやって來る時間ではないだろう？」

はて、と首を傾げたのはリュシアンと、今しがたまでにらみ合っていたエヴァンジェリンだ。アリスティドがフェリシアの執務室にやって來る時間は決まっている。

今日はそれよりも三十分ほど早い。と言う事は何か用でもあると考えるのが自然ではないだろうか。

「クロウ様が新作の味見をして頂きたいそうでした……」

アリスティドがここに來た理由を語った直後、執務室の扉が開かれる。ドアが開いた先に佇んでいたのは一人の少年だった。年はフェリシアよりやや年下、十五、六歳くらいに見えるが彼も魔族であるためあてにならない。

艶やかな濡羽色の髪に藍色の瞳。ただ右目には包帯が巻かれているが、巻き方が緩いのか金色の瞳が半分ほど覗いていた。

服装は袖が長く、裾も床に引きずるくらい長い不思議な装束で、顔立ちは整っているものの、何だか眠そうである。

そんな彼は銀のトレイを手に使っていた。白い皿の上に乗っているのはなんと、フェリシアの顔をデフォルメしたような非常に精巧に作られた薄紅色の饅頭だった。

クロウ、らしき少年は無言でつい、とトレイを差し出す。

「銘菓、魔王饅頭、だそうです」

「銘菓？」

「魔王饅頭？」

よく分からないアリスティドの説明にフェリシアとエヴァンジェリンは首を傾げている。ちなみにリュシアンは普段と変わらぬ感情の読めない笑みを浮かべ、ジュリアは全く驚いた様子はない。

それどころか何故か瞳を輝かせてフェリシア饅頭に見入っていた。

オウム返しのようなフェリシアとエヴァンジェリンの言葉にクロウはこくん、と頷く。彼は少年の姿をしてはいるが、この魔王城の厨房を取り仕切る料理長なのである。

もつともそれは料理という趣味を兼ねたもので、彼の表の顔でしかないのだが。時折こうして思いついた料理を持つてくるのだが、今日は饅頭らしい。何故フェリシアの顔を模しているのかは皆目見当がつかないが。

「で、何をどうしたらあたしの顔が饅頭？」

「何を仰るのですか、陛下。素晴らしいですわ。クロ、よく思いついてくれました。これでフェリシア様がどれだけ素晴らしいか布教できると言うものです。さあ、アリス。このフェリシア様饅頭をありとあらゆる国に流してしまいなさい」

うーん……、と唸りながらクロウが持った饅頭と睨み合うフェリシアに、ジュリアは人が変わった（彼女の場合は魔族だが）ようにライトグリーンの瞳を宝石のように輝かせている。

突然話を振られたアリスティドはと言うと、疲れたようにため息をついた。フェリシアのこととなるとこの幼馴染は人が変わるのだ。

「本当に貴方も大変で」

「……恐れ入ります」

やや呆れたような微笑を浮かべるリュシアンに、アリスティドは力なく言葉を返した。彼は神族で、魔族と敵対していると言っているのだが、それはアリスティドの性格によるものだろう。

魔王陛下の補佐も色々と大変なのである。……というかりュシアンも含めた彼女の周りの連中が。

「ジュリア、落ち着いて下さい。まだ試作の段階ですから……」

瞳を煌めかせるジュリアに、アリスティドがおずおずと言う。これはまだ試作の段階だし、大量生産をするなら考えるべきことは沢山ある。

しかしながら、彼女が言うようにこのフェリシア饅頭を持ってすれば幾分か魔族の悪いイメージを払拭出来るかもしれない。何せこんな可愛い少女が魔王だと人間たちは知らないだろう。

「まず中身を確かめねばなりませんね。陛下、申し訳ありません。お顔を……」

「あの、ジュリア。別にあたしの顔じゃないし、謝らなくていいから」

何故か眦にうつすらと涙を溜めるジュリアは、壊れものを扱うような手つきで饅頭を手にとった。そんな彼女に冷静にツツコミを入れたのはフェリシア本人である。

いくら自分を元にして作られた饅頭であっても、謝られると変な気分になってくるではないか。

「そしてお前は食べるな！ 食べるならクロに食べて貰うから！！」

フェリシアはリュシアンが持っている饅頭を引ったくり、眠そうにしているクロウの口に放り込む。ちなみに運動神経はイマイチなフェリシアである。リュシアンなら避けることも簡単だったろう。それをしないのは面白そうだから、に違いない。彼も大概性格が悪いのだ。何せフェリシアから腹黒神族と罵られるくらいである。

「……まったく、フェリシアも厄介なものに好かれたものよの」

ふう、と息を吐いたエヴァンジェリンは哀れむような視線をフェリシアに向ける。自作の饅頭を咀嚼していたクロウも彼女の言葉に無言で頷いた。

「なるほど。この薄紅色は桜の花弁を練っているんですね。中の餡も程よい甘味で、苺の酸味とぴったります。流石はクロ。これで気まぐれを起こさなければ言うことはありませんが……」

饅頭を半分に割って口に運ぶ。ジュリアの口から感嘆のため息が漏れた。もっちりとした生地は、桜の花弁を練って作られたものらしい。中の餡も甘過ぎずちょうどいい甘さで、丸ごと使われた苺の酸味が最高だ。

時たま作るゲテモノ料理さえなければ料理長としても最高なのが。

「それは無理じゃの」

「クロウ様は気まぐれですからね」

エヴァンジェリンが即座に返事をし、アリスティドは苦笑した。クロウはある意味、天気よりも気まぐれだ。作りたい時に作りたいものを作る。とんでもないゲテモノが出て来る時があれば、玄人の舌を唸らせる素晴らしい料理を作ることもある。

話の中心にいるはずの少年は眠そうに瞬きをしているだけで、話など聞いてすらいなかった。

「毒入ってないだけマシよね。何ならリュシアンのものにだけ入れてもいいんだけど」

「それなら心配いりません。私、大抵の毒なら効きませんから」

フェリシアとしては嫌味を言ったつもりだったが、さらりとかわされたばかりかとんでもない答えが返って来た。

クロウは人畜無害な外見とは裏腹に、暗器マニアで毒物マニアである。自分で毒を調合するくらいの凝りようで、彼の私室にはありとあらゆる毒物が貯蔵されているとか。

纏まりのない面々

「毒が効かない？」

「それは残念です」

フェリシアは不思議そうにリュシアンを見返し、ジュリアはさも残念そうに笑う。いくら魔族や神族であっても不死身ではない。毒を盛られれば当然死ぬし、殴られれば痛い。

人間よりずっと頑丈な者もいるが、反対に虚弱体質の者だっている。

「大体の毒には耐性がありますし、ないものでもよほど即効性ではない限り、神術で浄化出来ますから」

魔竜王ラインハルトの力を借りて行使する魔術とは違い、神術は神竜王グランミュリンの力を源としている。

その効力も治癒や浄化が中心であり、攻撃や身体強化に特化された魔術には存在しない効果があった。リュシアンの言う通り、彼ほどの神力の持ち主ならば、クロウの毒とて浄化出来るかもしれない。

「……なら一度試しても面白いかもしれませんね、陛下」

「許す。やろう、今直ぐに」

「やりません」

極上の、だがどこか闇を含んだ笑みを浮かべて提案するジュリアに、フェリシアも即座に頷く。

しかしながら、一秒もしないうちに満面の笑顔で拒否された。彼女らのことだ。毒だけでは物足りず、足や手、魔術までも出そうだ。どうせするなら、あの自称勇者様に犠牲になって貰えばいいではないか。

「止めておけ。のたうち回る神族など見ても暇つぶしにもならんわ」

「ああ、年を取ると耳も悪くなりますからね。本当に年は取りたくないものです」

ふん、と鼻を鳴らすエヴァンジェリンは随分ご立腹らしい。

しかし彼女を怒らせた張本人は、相変わらず笑って失礼な言葉を吐いていた。

二人の間に挟まれたクロウは、ぬぼーっ、と饅頭を食べているし、アリスティドはどうしていいか分からずおろおろしている。

フェリシアは我関せずといった雰囲気振り撒いて机に向かっているし、ジュリアに至っては止める気もない。

書類の整理を始した敬愛する陛下のためにお茶の準備をしているのだ。どいつもこいつも、何というか纏まりのない面々である。

「……危険」

ぼそり、と呟いたクロウはまだまだ眠そうだ。ただ、少年の視線は隣――肩を震わせるアリスティドに向いている。

「エヴァンジェリン様、リュシアン様！ いい加減になさって下さい――！」

フェリシアとジュリアが異変を感じた時には遅い。アリスティド

が声を張り上げた瞬間、空気中の水分が音を立てて氷結をはじめた。吐息が白くなり、瞬く間に周囲の気温が下がる。冷氣の中心は言わずもがなアリスティド。

「アリス！」

ジュリアが思わず彼の名を呼び、フェリシアが勢いよく立ち上がる。幼なじみの声に我に返ったのか、彼は隣のクロウを見て仰天した。

なんと少年の体半分が凍りついているではないか。当の本人はと言えば平気そうに、だが盛大なくしゃみをして鼻をすすっていた。

「寒い……」

「クロウ様！ 申し訳ありません！」

「へいき」

慌てて“力”の放出を止め、謝るアリスティドは顔面蒼白だ。見ているフェリシアたちが気の毒なくらいに。すると、肌を刺すようだった冷氣は消え、冷えた空気も元に戻っている。

このままアリスティドが力を使っていれば、間違いなくここは冷凍庫と化していただろう。

「……まことに申し訳ありません」

「アリスが謝ることない。だから気にしないで」

「陛下のおっしゃる通りです。悪いのはエヴァンジェリン様とその真っ白ですから」

頭を下げるアリスティドは可哀想なくらい肩を落としている。フエリシアが気にするな、と笑えば、ジュリアは輝くばかりの笑顔でリュシアンとエヴァンジェリンを睨み付けた。

リュシアンに至っては“真っ白”呼ばわりだ。

「真っ白ですか。ジュリア殿も全く分かりづらい例えを……」

「いやいや。真っ白はこれの中に一人しかいないから！」

困りますね、と肩を竦めるリュシアンはどう考えてもおかしい。この中で“白”は神族であるリュシアンただ一人だ。

白金色の髪に白い長衣といい、思わずフェリシアが突っ込んでも、青年は薄く笑うだけだった。

アリスティドは魔族の中でも雪麗せきれいと呼ばれる種族で彼の場合、感情が高ぶることでも力が暴発してしまう。つまり人間（というか魔族）冷凍庫のようなものである。

今回はそれを知っていながら、くだらない言いあいをやめない二人が悪い。本人に自覚はないが、ある意味ではアリスティドこそ最強かもしれない。

「危うく銀世界になるところだったわ。わらわは火と氷は好かん。ああ、アリスがどうこうと言っておる訳ではないぞ？」

「は、はい……」

ふう、と息を吐いたエヴァンジェリンは、外見には似つかわしくない老獪な笑みを浮かべた。彼女は所謂吸血鬼、とされる種族。彼女らの力の源は血だ。

しかし火は血を焼き尽くし、アリスティドの力は血を凍りつかせる。一概には言えないが天敵、と言っても過言ではないかもしれない。

「フェリシアさ……へぶっ！」

とその時、開け放たれた扉が勢いよく閉められた。他でもないリュシアンの手で。ごん、と言う音と共に何かがぶつかった盛大な音が響き渡る。

被害にあったのは間違いなく“彼”だろう。人族にして自称勇者、そしてフェリシアの愛の奴隷である。

「これで安心です」

「今回ばかりはよくやった、リュシアン」

晴れやかな笑みを浮かべるリュシアンに、フェリシアも労いの言葉を掛ける。

だがしかし、ここに納得していない者が一人。

「いいえ。たちの悪さでは断然、こちらの方が上です」

他でもないジュリアである。“あちら”は鬱陶しいだけでまだ可愛いものだ。

だがこちらは違う。鬱陶しいだけの彼と策士な神族では比べ物にならない。清廉潔白のはずの神族がどこをどう間違ったら“これ”になったのか。

「お褒め頂き光栄です。ですが私は神族。神竜王に誓って清廉な神族ですよ」

輝くばかりの笑顔からはひと欠片の邪気も感じられない。美しく、清い神族そのものだ。……中身は別として。

結局、それから約一ヶ月後、フェリシアの承認を受けたアリス（半ば強制的なジュリア）の命により、魔王饅頭は名物として売り出されることになる。

恋に落ちました

初めて“彼女”を見た時、なんて可愛らしい人なんだとセエレは思った。とても倒すべき魔王とは思えなくて、一瞬で彼女に見入られていたのだ。

象牙や黄金をはじめとした貴金属がふんだんに散りばめられた玉座に腰掛け、セエレを見下ろしているのは少女だった。人間で言うなら、十六、七歳くらいだろうか。

腰まで届く艶やかな髪は、淡い薔薇のような薄紅色。長い睫毛に縁取られたアーモンド型の瞳は目にしたこともない美しい孔雀色をしていた。

抜けるように白い肌には一点の染みもなく、まるでアンティークドールのようだ。短いスカートに、金糸の刺繍が施された黒い外套を身につけた彼女は、後数年もすれば絶世の美女となることだろう。しかしセエレの目には魔族全てを束ねる魔王というより、触れれば折れてしまいそうなほど華奢な少女にしか見えなかった。

「お前か、私を倒しに来た勇者というのは。人にしては珍しい紫水晶のような瞳をしているな。……このまま大人しく出ていくと誓うなら命だけは助けよう」

足を組み、尊大に彼女は言った。鳥が囀るような美しい声だというのに、少女の声には魔王としての威厳に満ちている。ただ違和感を感じたことから、無理をして喋っているのだろうか。

セエレは今まで瞳を誉められたことなど、生まれてこのかたなかった。魔族にしては珍しい、とは言えない瞳の色も人族では違う。

紫の瞳は魔族の証だ、忌み子だと罵られ、蔑まれながら生きてき

た。瞳の色が皆と違う。ただそれだけで。

だから恋をした。落ちるのは一瞬。セエレは彼女に恋をしたのだ。

何だかあり得ない重みにセエレの意識は浮上する。腹が重いのだ。何故か柔らかくて暖かい何かと、かたくて冷たい何か。

うつすらと目を開くと、真っ白な犬と黒に銀の細工がされた軍靴が視界に飛び込んで来た。

円らな黄色い瞳を向けているのは、セエレの愛犬エクスカリバーン、通称エクス。ではこの軍靴は誰だろう？

ふと視線を上げると、絶対零度の眼差しをした青年と目があった。

「やっと起きたか。大馬鹿者が」

セエレを見下ろしていたのは、二十歳から二十代前半ほどの美しい青年である。細身であるものの、しなやかで鍛え上げられた体から弱々しさは微塵も感じられない。

銀糸の刺繍が施された黒の軍服を隙間なく着こなし、同じく銀の縁取りがなされた軍帽を被っている。

長い銀糸の如き髪は三つ編みにして右肩に流しており、耳はセエレのそれと同じではなく、銀の狼の耳をしていた。切れ長の瞳は薄氷を思わせる灰色掛かった青で、軍靴をセエレの腹に乗せたままである。

「貴様は犬以下か。分かったらさっさと起きろ」

「おはようございます、ロー団長！」

セエレは元気よく返事をする、腹からエクスカリバーンを退かして青年に敬礼した。永久凍土もびっくりの冷たい視線でセエレを見下ろしている青年こそ、国一番の剣の使い手と謳われ、騎士団長も務める人狼族のローウェルだった。

何故騎士なのに軍服かと言うと、身軽な人狼族に鎧など不要だからだ。

セエレの腹から下ろされたエクスカリバーンは、嬉しそうにローウェルのそばを走り回っている。犬と狼で相性でもいいのだろうか。飼主より懐いているような気がしてセエレは少し面白くない。

ローウェルはエクスカリバーンの頭を撫でてやると、芸術品のよくな美貌を歪め、鬼の形相で背後の少年を睨み付けた。

「フレディ。やはりお前に任せた俺が馬鹿だったらしい」

ローウェルの後ろにいる少年は、十代半ばから後半ほどだろう。短く刈られた小麦色の髪に忙しなく動き回る瞳。ローウェルより幾分か装飾と刺繍が少ない黒の軍服を纏っている。

ただしきつちりと着こなす彼とは違い、フレディと呼ばれた少年はかなり適当な上に好き勝手に着崩していた。

白いシャツのボタンは二つ以上あいているし、上着はただ羽織っただけ。軍靴は泥で汚れており、折角の銀の細工が散々である。

おまけにネクタイはしていないし、軍帽すら被ってもいない。身も凍るような団長のおしかりも彼には全く効果がないらしく、悪びれる様子すらなくにつこりと笑っている。

「迎えに来たよ。ただ二度寝しただけで」

「それが馬鹿だと言っている。お前の頭は花畑か、それともただのお飾りか。考えることを止めて退化してもそれはお前自身の責任だ。ペットとして可愛がってもらえ」

あははは、と視線を逸らして頭を掻くフレディに容赦のないローウェルの声が飛ぶ。身体能力や戦いでの駆け引きに関して文句はなくても、問題は“頭”の方だ。

考えるより先に体が動くタイプであるフレディは、あまり深く考えようとしなない。そもそも考える気さえないのだ。

悩みがない、という点では素晴らしいが、本能だけで動くならそれこそ獣と同じではないか。

だから常日頃から頭を使えと言われているのだが。

ローウェルの言葉で言うなら、フレディの頭は万年お花畑状態で

ある。

「そして貴様は何をやっている？ さっさと着替えて用意をしろ。さもないと陛下に言いつけるとしよう」

「ちよっ！ 酷いですよ、団長。フェリシア様の愛を疑うんですか？」

「だからどうしてそうなる」

とんでもないことを口走るセエレに、ローウェルは冷静に突っ込む。何だか色々ずれまくっている青年である。恐るべしセエレ。

フレディはというと、これ幸いとエクスカリバーンと遊んでいた。もっとも、遊んであげている、というより遊ばれている、と言う方が正しいかもしれないが。

寝言は寝て言え

人族であるはずのセエレが何故、魔王の城で暮らしているのか。それは一重にフェリシアが原因である。勇者と言っているのいい厄介払いをされたセエレは、魔王を倒すために城へとやって来た。魔族の国に入っても怪しまれなかったのは、彼の紫の瞳のせいである。

しかしながら、世の中そう甘くはない。直ぐ様目の前の青年、ローウェルに捕まり、魔王の前に引きずり出されたのだった。

だがフェリシアに一目惚れしたセエレは勝手に魔王城に居座り、呆れた彼女がローウェルに任せた、というか押し付けたのだった。

「では団長、早速交代に……」

「貴様は行かなくていい。フレディ、お前もいつまで犬に遊んで貰ってるつもりだ」

軍帽代わりにエクスカリバーを頭に乘せようとしたセエレの動きが止まる。両腕を組み、仁王立ちで立つローウェルの姿はかなり迫力があつた。

セエレは一応、軍服を着ることを許されてはいるが、騎士でもないし兵士でもない。よって歩哨を交代する必要もないのだ。

「えー、もっとエクスと遊びた……」

「なら一生遊んでろ。それといつも言っているはずだ。敬語を使えとな」

「冗談なのに。ロー団長こわ……すみません、冗談が過ぎました」

フレディが不満そうに唇を尖らせた瞬間、彼は文字通り、彫像のように固まった。ローウエルを本気で怒らせたら恐ろしいどころの話ではない。

殺気すら漂ってきそうだ。あまりの迫力に、エクスカリバーがきゅーん、とセエレの頭に飛び乗った。

「おはようございます、今日も賑やかですね」

そこへ、ローウエルでもフレディでも、ましてやセエレでもない第三者の声が響く。

思わず聞き入ってしまいそうなほど心地のよい声だが、ローウエルには忌々しい以外の何ものでもない。“彼”の姿を視界に捉えたフレディが思わず叫ぶ。

「出た！」

「失礼ですね。私は台所に発生する“あれ”でも、夏に需要がある“それ”でもありませんから」

失礼ですね、と言いつつも彼が気分を害した様子はない。台所に発生するあれ、は茶色いモンスター？で、夏に需要のあるそれ、は背筋が寒くなるものである。

思わず見惚れるような笑みを浮かべているのは、無駄に美形な青年だった。ここにいる誰とも違う色彩を纏う彼が魔族ではないことは直ぐに分かる。

月の光を集めたように煌めく髪は金掛かった銀色。長いそれを金輪で纏め、肩に流していた。影を作るほどの睫毛に縁取られた瞳は、

珍しい月色。

裾の長い白の衣に、左肩には月の装飾が付けられている。目の覚めるような、それでいてこの世のものではない美貌の青年は、月光の化身というにふさわしいかもしれない。

青年の姿を捉えたローウエルは無言で抜剣し、一瞬にして距離を詰める。

しかし、青年はまるで羽根でも生えているかのように軽やかに彼の間合いから逃れた。

「いつも熱烈な歓迎、ありがとうございます」

「寝言は寝て言え」

「残念ながら私は寝ていませんし、朝の運動には丁度良いでしょうね」

笑いながらローウエルの剣を避ける青年と、追撃の手を緩めないローウエル。これが魔王城の日常である。

ローウエルは国一番と謳われるほどの剣の使い手だ。彼も本気を出していないにせよ、青年――リュシアンも危なげなくローウエルの剣をかわしていた。それが必要最低限の動きで、まるで円舞でも踊るように軽やかに。

ローウエルは冷たい表情で剣を振るい続け、リュシアンも笑みを湛えたまま、彼の攻撃を避け続けている。

二人にしてみればこの程度のやり合い、朝の散歩程度のものなのだろう。しかし、

「あ、いた。いたたた……」

いつの間にか、何故かセエレを挟んでやりあっているではないか。ローウエルの剣がセエレの頬や腕を掠める。下手に動けば首が飛びそうだ。

勿論、ローウエルはそんなヘマなどしないだろうが、セエレは人族である。ローウエルにとってどうでもいい存在には変わらない。

「うわー、いいな、セエレ。俺も混ざりたいなあ」

「止めといた方がいいと思うよ。このくらい、フェリシア様への愛で……へぶっ！」

エクスカリバーを頭に乗せ、飛び出たくて堪らないと言った風のフレディにセエレが笑う。物事を彼らの基準で考えると痛い目にあう。フレディが強いことは知っているが、あの二人が怖すぎるのだ。

瞬間、愛しのフェリシア陛下のことを思い浮かべようとしたセエレの頬に強烈な一発が入った。

「ああ、すみません。手が滑りまして。でも剣を使わないだけ手加減はしていますよ」

わざとらしく、だがにこやかに微笑むリユシアンの仕業である。偶然ではなく、明らかに確信犯だ。神族は本来、争いを好まず、気性の穏やかな者ばかりだというのに彼はその範疇から外れていた。確かに物腰は柔らかだが、自分から喧嘩をふっかけたり、基本は十倍返しと容赦がなさすぎる。

紙のように吹き飛ばされたセエレと言えば、何とぴんぴんしていた。傷という傷もなく、頬がうっすらと赤くなっているだけだった。

「分かります、僕の愛故に、ですね。リュシアン殿」

「私にはまったく分かりませんが。可哀想に。頭でも打っておかしくなりましたか」

自分の世界に浸りまくっているセエレに、リュシアンの冷たい視線が飛んだ。ちなみにその間もリュシアンとローウエル攻防は続いている。

「なあ、エクス。何して遊ぼうか」

「ウウ、ワフっ！」

「ん？　そうか、そうか」

そんな中、一人と一匹は騒がしい面々などそっちのけで、ほのぼのとした雰囲気醸し出していた。

神経毒は重要です

魔王陛下はそれなりに忙しい。お飾りではないため当たり前だが、人族の王は魔族と違って実力主義ではなく、世襲制が多いのだという。

勿論、フェリシアも午前中は偉大な魔王となるために勉強に励み、午後からは膨大な書類の整理とかなり多忙である。

しかしながら、魔王城の書類の殆どを一手に引き受けるのはアリストイドであり、フェリシアとは比べ物にならない速さでそれをこなす。

普段から苦勞が絶えず、濃すぎる面々に押され気味な彼だが、魔王の補佐役としては非常に優秀だ。

「ああ、アリス。フェリシア様様は様子はどう？」

「勉強に励まれてましたよ。今日はクロウ様の薬物学だったと思いますが」

椅子に腰掛け、執務用の机を前にしてアリストイドはひたすら山積みになった書類を捌いていた。声の主――ジュリアに一切視線を向けることもなく。

見なくても魔力の気配で分かるし、それでもアリストイドが彼女の声を聞き間違うはずもない。

「……クロは優秀ではあるけれど、偏った知識を与えそうで……。それにしても懲りずにまたやって来たようね。それに、ローはからかいがあるから、格好の遊び相手にされて……。嘆かわしい」

クロウは隠密としては申し分ないが、彼の知識は偏り過ぎている。

おまけに授業中も殆ど喋らないため、フェリシアの一人芝居に見えそう。

ちなみに彼女が、懲りずにやって来たといったのは、言うまでもなく無駄に美形な神族の青年である。

ローウェルはクールで近寄りがたく見えて、実はかなりの人見知りである。彼のあの性格は言わば他人から自分を守る鎧。リュシアンはそんな彼をからかうのが好きなのだろう。

「私たちに知らせるように、わざと気配を漏らしておられるようですし……謎が多い方ですね」

それなのだ。アリスティドが言うように、リュシアンはいつも気配を隠そうとしない。まるで自分たちに知らせるように。

そんなこともあり、ジュリアは得体の知れない彼が気に入らないのだ。

「まったく忌々しい。夢にさえ入れれば、至上の悪夢を見せてやるのに」

「……ジュリア。貴方は陛下が絡むと過激になるんですから。少しはおさえて下さい。ジュリアまでそれでは私がもちません」

美しい、だが背筋が凍るような笑みを浮かべる幼なじみを、どうにか宥めようとするアリスティド。彼女は夢魔族であり、大抵の相手なら悪夢を見せて惑わすことは容易い。

しかし神竜王グランミュリンの加護を受けたリュシアンには悪夢を見せるどころか、夢にさえ入れないのだ。

「あら、いいじゃない。アリスがいるんだから」

「あのですね……」

少しは抑えてください、というアリスティドにジュリアは不思議そうに答える。適当に聞こえるが、裏を返せばそれは彼女がアリスティドを信頼しているということ。

フェリシアの補佐が彼でなければ、ジュリアがこうもはっちゃけることも無かったかもしれないが。表面上は穏やかで、物腰も柔らかなジュリアだが、それは彼女の表の部分でしかない。

「そういう問題ではありません。あなたはいつもそうなんですから」

書類を捌く手を止めてアリスティドは苦笑した。この幼なじみはいつだってそうなのだ。

それでも彼女がいなければアリスティドがここにすることもなかっただろう。

「そろそろあれを止めないと。ローも限界かしら。それじゃあ、アリス。また後で」

誰かが止めないとあの神族は、更に面白がるだけだ。まだフェリシアにちょっかいを出さないだけマシだが、その点は配慮しているのかしてないのか。

ジュリアはしばらく書類を片付けるアリスティドを眺めていたが、身を翻して部屋を出た。

フェリシアはそっと目の前の少年を見上げた。少年――クロウは眠そうに藍色の瞳をしばたかせている。本当に眠い訳ではなくそう見えるだけだ。

年の頃はフェリシアと同じか少し下くらいだが、彼が自分よりずっと年上だということをフェリシアは知っている。

普段は趣味が高じて料理長などやっているが、彼の本業は隠密。見た目からはまったく分からないが、大量の暗器を隠し持っていた。

ジュリアが前もって用意してくれていた紅茶を口に含みながら考える。

どうしてこんな時に限って“あいつ”は来ないのだろう。そう考えてフェリシアは自己嫌悪に陥った。何故自分がリュシアンを待つ

ているのか。

自分で自分を殴りたい気分である。フェリシアが百面相をしていると、

「……ん？」

クロウが小首をかしげて、不思議そうにフェリシアを見つめていた。

そんな彼の視線に気付き、慌てて首を横に振る。

「なんでもない！ なんでもないから！」

「ん」

危うく失態を晒すさらすところだった。危ないところである。額に浮かんだ冷や汗を拭い、手元の本に集中する。

しかしながらまったく頭に入っていない。悲しいくらいに。

「へいき？」

「うん。ごめんね、クロ」

彼にまで心配をかけるなんて魔王失格だ。フェリシアは自分がまだ未熟だと言うことは理解しているし、だからこそこうして学んでいるのだが、情けない限りだ。神族に弱みを見せてはならないのに。どこまでいっても魔族と神族は相容れないのだから。魔竜王ラインハルトと神竜王グランミュリンのように。

考えるなと自分に言い聞かせてみても、中々上手く行かない。あいつの気配を感じるからだろうか。気配を漏らしているのは、完全

にわざとである。何もかも気に入らない。

リュシアンだけでなく、分かっているのに気になって堪らない自分にもいらした。

リュシアンはただの神族だ。神族にしては風変わりで、変なやつだとしても。

「神経毒は……重要……」

その間もクロウの授業は続く。様々や毒草や毒花など、彼の口数は少ないが、実に分かりやすい。流石は毒物マニアである。

しかしながら、今のフェリシアの頭にはまったく入ってこないが。すつ、とクロウが左手を上げた瞬間、何かが放たれた。フェリシアには目視出来なかったそれは、銀色の光だろうか。

「……そこ」

「うわ！」

聞こえた声はクロウのものでも勿論、フェリシアでもない。

突然目の前に現れたのは二十歳前後の青年だった。クロウが投擲したのはどうやら苦無だったらしい。鈍く光る刃は、青年を逃さぬよう、彼の袖をしっかり縫い止めていた。

「げ……」

青年の姿を目にしたフェリシアが嫌そうな顔をする。一見すると魔族らしき青年だ。さらりと流れる髪は闇色で、瞳はセエと同じ紫。

抜けるように白い肌には一点の染みもなく、降り積もった白雪のよう。ただ身に纏う服は髪と正反対の白だった。

しかし彼が魔族ならば、フェリシアがここまで嫌な顔をするのはおかしい。何故なら、魔族たちは全てフェリシアの民なのだから。

「げ、って何だよ。げってのは」

やや呆れたように、だが楽しそうに笑う彼は、フェリシアの民でもなければ魔族でもない。闇色の髪と紫の瞳という魔族の色を持ちながらも、彼は真正正銘の神族で、リュシアンの子族——ソールである。

もつとも、親友と口にすればリュシアンが非常に嫌そうな顔をするのだが。

「それ、毒塗ってある……」

「流石クロ。えっと何毒？」

相変わらず眠そうな顔をするクロウが何気なく言う。暗器マニアで毒物マニアである彼だ。

武器に毒を塗っているのは、おかしいことではない。

フェリシアが瞳を輝かせて尋ねると、眠そうな声で神経毒、と返ってきた。

「う、嘘だろ？」

「……冗談。本気にした？」

途端に真っ青な顔になって恐る恐る問う青年に、クロウは平坦な声で答えた。冗談だと。

へなへなと崩れ落ちる青年を見て、魔王城の料理長はほんの僅かに微笑んだ。誰より恐ろしいのはこの少年かもしれない。

台所に発生するアレ

「で、何の用？」

魔族の色彩を持つ神族は、一向に出て行こうとしない。じつとフエリシアを見つめているため、居心地が悪いっただけありゃしない。しかし邪魔をする訳ではないから、対応に困る。それはクロウとて同じだろう。

少しでも邪魔をすればクロウは容赦しない。袖に仕込んである鋼糸で細切れにされても文句は言えないはずだ。いくら神族とは言え、彼の攻撃からは逃れられまい。……流石に細切れまではしないだろうが。

「ん？ 姫さんの顔見たかっただけ」

「どこかの誰かと一緒に冗談言わないで。あたしは姫さんじゃないから。……でも、どうして姫さんなの？」

今日のフェリシアはすこぶる機嫌が悪い。そもそも姫さんとは何だ。自分はれっきとした第二十四代魔王だというのに。

しかしいくら口を酸っぱくして言っても、ソールはフェリシアを『姫さん』と呼ぶのだ。

「そりゃ、シアンの“姫”さんだからな。いやあ、あれを連れ戻す俺も大変なんだぜ？」

「は？ そんなの知らないから！ 連れ戻すなら首根っこでも掴んでさっさと連れて帰って」

何がリュシアンの姫さん、だ。魔術でこの神族を吹っ飛ばしてもいいのだが、セエレ並みの耐久力（ゴキ○リ並みともいう）のためやる気も起きない。無駄な労力を使うほど、フェリシアは馬鹿ではないのだ。

ソールはどうやら、リュシアンを連れ戻すという役目を持っているらしい。

しかし、彼がリュシアンを捕まえられることはまずない。フェリシアとしてみればイライラの原因である“あれ”を早く持って帰って欲しいのだが。

「それが出来れば俺も苦労しないって。ほら、お陰で髪と瞳がこんな色に。きつと心労だぜ？」

「……それ、生まれつき」

「だあー、もう！ 御託はいいから！ そっちの神族らしからぬ色は元からだし、大体リュシアンはここにはいないの！」

な、と笑って髪を弄るソールにクロウから冷静な突っ込みが入る。彼は元から闇色の髪と紫の瞳だし、明らかにストレスとは無縁の者が何を言う。

そもそもリュシアンを連れ戻しに来たのなら、まず場所を間違っているではないか。

「いえ、ソーはあってますよ。ちゃんと、ね」

フェリシアがまくし立てた瞬間、この部屋の誰でもない声が響く。光の加護を一身に受けた白金色の髪と月色の瞳をした青年は、いつの間にかクロウが投擲していた苦無を掴み取り、くるくると手の中で回していた。

ふふん、と不敵に笑う青年はとても言葉では言い表せないほどの美貌の持ち主だ。彼の前では全てが霞んで見える。影を作る睫毛は銀糸で、肩を流れる髪は金掛かった銀糸であり、光の洪水のよう。すっと伸びた鼻筋に瞳は神竜王グランミュリンが愛した月色をしていた。

黙っていれば文句なしの美貌。ふわりと笑った顔は赤面しそうな威力がある。

しかしフェリシアはもう耐性がついていて、クロウはいつもの無表情。

だが彼がただ黙っているだけの青年ではないことはここにいる皆知っていた。誰に対しても敬語ではあるが、皮肉屋で容赦の欠片もない。ある意味では神族というより魔族並に性格が悪いのだ。

「こんな物を投げられては危ないですよ。私でなければまず当たっていたでしょうね」

グランミュリンの加護を受けた青年は笑みを湛えたまま、投擲された苦無をクロウに投げて寄越した。クロウは無言でそれを受け取ると長い袖の中に戻す。

ジュリアやローウェルと違い、彼はリュシアンを毛嫌いしている訳ではない。クロウの場合は条件反射のようなものだろう。

「よし、シアン。姫さんのところに来ると思ったぜ。その前に泡吹いて死ぬとこだったけどな」

ひょっこり顔を出したソールはにこやかに笑ってリュシアンの隣に立った。流石に泡を吹いて死ぬは言い過ぎだろうが、彼も本気でそうは思っていないのだろう。こちらも神族らしからぬソールの軽口だ。

「大丈夫ですよ。生きてさえいれば私が浄化してあげますから」

「で、何の用？」

今まで黙っていたフェリシアだったが、先ほどソールがやって来た時と同じ問いをリュシアンにする。その顔は非常に不機嫌そうだ。それは勿論、リュシアンのせいでもあり、認めたくはないが彼の訪問を期待していたフェリシア自身のせいでもあった。

「私があなたに、フェリシアに会うのに理由は必要ですか」

「必要って言ったなら？」

「お分かりでしょう？ フェリシア。私は……」

フェリシアが仏頂面で尋ねれば、神族の青年は極上の笑みを浮かべて言葉を紡ぐ。その先を聞きたいような、聞きたくないような何とも言えない気持ちである。

それすらも彼の思惑のような気がして気に入らない。

「あー、はいはい。お二人さん。邪魔して悪いけど、クロちゃん怖いぜ？」

そんな二人の間に割って入ったのは他でもないソールだった。いつものように軽い口調で、先ほどから一言も喋らないクロウを指す。だが彼の表情は全く変わらないように見える。それほど些細な変化だ。

「クロ……？」

クロウは普段から無表情で、感情の変化が読み取りづらい。些細すぎる変化だし、今も精々微かに眉が上がっただけだ。フェリシアがクロウの名を呼ぶと、彼はふるふると首を横に振った。

「……別に怒ってない。でも、邪魔された」

「ああ、それは申し訳ありません。クロウさん。ほら、ソーも一緒に謝って下さい。許して下さいますか？」

ぼそぼそと言うクロウにリュシアンは合点がいったように笑う。そしてソールの頭を無理矢理下げると素直に謝った。隣で痛い痛いと言っているもまるで聞いていない。

するとクロウはこくん、と頷いた。どうやら許してくれたらしい。

「それもこれも、リュシアンとソールが湧いて出てくるから」

「いや、姫さん。いくら何でもそれは酷いぜ。俺らはゴキ○リか何かか？」

大真面目に言い切るフェリシアに、ソールが細やかに抗議する。湧いて出て来るとはまるで虫ではないか。台所に発生する茶色の“あれ”じゃあるまいし。

「ソーはゴ○ブリで十分ですよ」

しかしある意味ではこの人物も同族に容赦がない。満面の笑顔で言い切ったのだ。ソールなんてあの茶色生物で十分だと。

それでも神竜王グランミュリンの眷属か。ソールは今でもたまに思う。目の前の美しい青年は、神族の皮を被った魔族ではないのか

と。

「フェリシア様の授業を邪魔なさるとは良い度胸です。徹底的に叩き潰して差し上げますからそこに仲良く並びなさい。神族ども」

「剣の錆にしてくれる……」

とその時、永久凍土より冷ややかな声が響く。現れたのは笑みを浮かべながら殺気を撒き散らすジュリアと、既に剣を抜き放ったローエル。特にジュリアはかなり怒っていた。

しかし頼みの綱であるはずのアリスティド、別名魔王城の良心とされる彼はここにはいない。

するとジュリアたちの後ろからこっそり現れたセエレが、フェリシアに近寄ろうとする。

「フェリシアさ……」

「貴方は黙ってて下さい」

「貴様は来るな」

「あなたはいりません」

何というかご愁傷様である。リュシアン、ローエル、ジュリアの三人から容赦のない一発（三人なので正確には三発なのだが）を受けたセエレは、壁に叩きつけられ、幸せそうにのびていた。

頭の上に星とハートが出そうなくらい幸せそうな顔で。フェリシアの夢でも見ているのだろうか。

「いつもながらおっかないな」

「それよりソールは早く出て行って」

おっかないのは分かるが、ソールが堂々と言えたことでもない。
フェリシアからしてみればソールもソールで厄介なのだ。

しかしながら何事も、思い通りにはいかないものである。

運命なんて信じない

「はあ、もう。まったく……」

ジュリア、ローウエル、リュシアン三人はフェリシアなどそっちのけで遊んでいる（あくまでフェリシアから見ても、だ）。

セエレは打ち所でも悪かったのか、一人の世界に入っているし、騒がしいったらありやしない。もうため息しか出てこないではないか。

「ね、へーか。アリス呼ばなくていいの？」

「いいの。今は忙しいんだから放っとくのが一番」

エクスカリバーを頭に乗せ、のほほんと尋ねるフレディにフェリシアは呆れたように肩を竦める。いつの間にか入って来たらしい。いつもの彼なら速攻で乱闘に加わりそうだが、相手が相手なため、犬と遊ぶことにしたようだ。

ソールはと言えば、リュシアンを止める気すらなく、右手に顎を乗せ、三人を眺めていた。この乱闘騒ぎを止められるのはもはやアリスティドしかない。

しかしながら、彼は忙しいのだ。これ以上、アリスティドの苦勞を増やせないというフェリシアの配慮もある。触らぬ神に祟りなし、いや、この場合は神族と魔族だが。

「……うるさい」

「おー、クロちゃん今度こそ怒っちゃったぜ」

クロウは、普段から声を荒らせることも無ければ、怒ることだつてない。

しかしいつも平坦な声がほんの少しだけ怒りを含んでいる。ソールにリュシアンと二回も邪魔された上に、今度はこの乱闘騒ぎだ。

仏の顔も三度まで。

しかしその発端となったソールは、楽しそうに肩を揺らして笑っていた。クロウが滑らかで、それでいてどこまでも自然な動きで指を動かす。その瞬間、ぴたりと三人の動きが止まった。

彼の手から伸びているのは糸だ。それもよほど注視しなければ見えないほどの細い糸。しかもただの糸ではない。クロウが扱うそれは、鋼の糸、鋼糸とされるほどの切れ味を誇る特殊な糸。

本来なら体など簡単に切り裂けるようなものだが、クロウは牽制のつもりだ。本気になっていないこともあるが、どの糸も寸でのところで止めている。

おまけにリュシアンをはじめとして、こんな事で怪我などするはずがない。

「ジュリア。いつものお茶をお願い。ローはセエレとフレディを連れて持ち場に戻って。ソールはそのリュシアンを連れて帰りなさい」

フェリシアが声を発した瞬間、鋼糸がクロウの手から消え、三人も自由になる。ジュリアは敬愛する彼女たちにお茶の準備をし、ローウェルは丁寧な頭を下げてフレディとセエレの首根っこを掴んで出ていった。

「なー、シアン。姫さんもああ言ってることだし、帰ろうぜ」

「帰るなら、ソー一人で帰って下さい。私は私の意思でのみ動きま
す」

「なら、勝手にすれば？　でも邪魔だけはしないで」

凍えるような視線でソールを見た後、リュシアンはにこりと微笑
んだ。相変わらず無駄な美貌である。これで口と性格が悪くなけれ
ばまだ目の保養にはなったのに。と言うのはジュリアの談だ。

「はい」

「え？　ちょ、ちよつと……」

邪魔だけはするなど言っただけだが、いつの間にかリュシアンがフ
ェリシアの手を取っているではないか。当の本人は、力任せに振り
払うことも出来ずにいるフェリシアの様子を楽しんでいるように見
える。

「フェリシア様、お待たせしました」

怒りを含んだ声と共に、テーブルにどん、と重い音を立ててティ
ーポットが置かれた。勿論、ジュリアの仕業である。

普段の彼女なら、熱々の紅茶をリュシアンにぶっかけそうだが、
“フェリシアのため”にいったお茶では流石にしないらしい。

「あち、あちちち！！　何でシアンじゃなくて俺にお湯かける訳、
忠犬ちゃん！？」

ぼけー、と眺めていたソールはあまりの熱さに飛び上がった。

見ればフェリシアに用意したものとは違う、お湯が入ったポットを持つジュリア。つい先程までそのポットがソールに向けて傾けられていたのだ。

「忠犬とは人聞きが悪い。神族のお子様が偉そうに。フェリシア様至上主義と言いなさい。それはそれは……あまりに存在感が薄くて気付かなかったようで。そもそもこの忌々しい神族にお湯をかけても面白さなど皆無ですから」

非の付け所のない完璧な笑顔だが、見る者を凍り付かせる凄みがある。拔群のプロポーションに、落ち着いた美貌を持つジュリアからすればソールはそれこそ“お子様”なのだろう。

しかし存在感が薄いとは酷い言われようだ。

「存在感薄いって……」

「薄い……」

無口で無表情のクロウにまで言われる始末だ。普段感情という感情を表さない少年が、少しあわれむような視線でソールを見つめているのではないか。

「それは仕方ありません。事実です」

ジュリアとクロウの言葉にショックを受けたらしいソールに、リユシアンがにこやかに笑ってとどめの一言を放つ。

しかし、どさくさに紛れてフェリシアの手を取っているのだから彼も抜け目がない。

「いいから、リユシアン……!」

いいから手を離せと言ってもリュシアンは静かに笑っているだけだ。フェリシア専用のティーカップに紅茶を注ぎ終えたジュリアが、がしっとリュシアンの手を掴んで引き剥がした。

「そして貴方はフェリシア様の手を離しなさい」

「これは残念」

残念と言いながらも全く残念そうには見えない。完璧な微笑を浮かべるリュシアンは、悔しげでもなければジュリアに対して怒るということもなかった。

受けたショックが大きいらしいソールはと言えば、フェリシアたちから背を向け、壁に向かって、どうせ俺なんて、と呟いている。

「本当に忌々しい。後で塩でもまいて置きましょう」

「どっちかと言うと、あたしたちがまかれる方じゃ……」

早速塩を用意しそうな勢いのジュリアに、フェリシアが小さくつつこみを入れる。魔族が塩をまくのもおかしな話だ。

どちらかと言うと、というより魔族は間違いなくまかれる方だろう。

だが彼女は大真面目だ。半分以上は本気なジュリアの言葉を聞いた料理長であり、魔王城の厨房を取り仕切る少年はぽつりと本音を呟いたのだった。

「塩……もつたいない」

そもそもリュシアンは何故、自分なんかに構うのだろう。それはここ一年、フェリシアが抱いていた疑問だった。

勿論、リュシアンに面と向かって聞いたことはない。

いや、心のどこかで恐れていたのだろうか。彼の答えを。フェリシアは何も知らないのだ。リュシアンの本当の名も、年も。聞いたこともないし、別段気にしたこともなかった。

では今はどうだろう。気にならないか、と言われれば気になる。

それに、ソールはいつだってリュシアンを迎えに来る。その理由はなんだ。

わざわざ迎えに来る“何か”があるのではないか。そう勘ぐらずにはいられない。

「どうしました？」

「何でも、ない……」

嘘だ。それでも咄嗟に口をついて出たのはそんな言葉だった。リュシアンが珍しく、案じるようにフェリシアを見つめている。

ちなみにソールは相変わらず、壁に向かってぶつぶつ呟いているし、クロウは空気を読んで知らないふり。唯一邪魔をしそうなジュリアはフェリシアのために菓子を取りに行っていた。

フェリシアがリュシアンと二人で（正確には二人ではないが）話すことは滅多にない。大体ジュリアが乱入してくるからだ。

フェリシア至上主義で、何よりも彼女を大切に思うジュリアはリュシアンが何よりも気に入らないらしい。

「フェリシア？」

「何でもないから……」

闇と光のように、魔族と神族は交わらない。それが絶対の理。運命だ。リュシアンの考えなんてフェリシアは知らない、分からない。すると、彼女の心を読んだかのようにリュシアンは極上の笑みを浮かべ、歌うように言った。

「それが“定め”ですから」

「定め？」

「ええ。あなたたち魔族とわたしたち神族が争う運命だと言うのなら、これもまた定められたこと」

まるで謎掛けのようだ。争いが運命だと言うのなら、自分たちの

出会いもまた運命だったと言いたいのか。フェリシアはリュシアン
の言葉に振り回されてばかり。

いつも余裕たっぷりな彼が腹立たしくて、悔しかった。

リュシアンに抱く“想い”は複雑過ぎてとても一言では言い表せ
ない。いつだって肝心な時は邪魔が入るのに、こんな時に限ってジ
ュリアは戻って来なかった。

「あたしは……運命なんて信じない」

運命なんて不確かなものは信じない。だってそうとでも言わなけ
れば、一瞬でも心を傾けそうになってしまうから。

魔族の王として許されない。何よりフェリシア自身が許さない。

「なら信じさせてさしあげます」

「リュシアン……？」

妖艶とも言える笑みを浮かべるリュシアン。ただ清く、美しいだ
けではない。その笑顔には抗い難い色香があった。

彼は本当に神族なのだろうか。見慣れているはずの、フェリシア
でさえ見入らずにはいられない。

神竜王に愛された者

初めて彼を目にした時、月光の化身のようだと思った。神竜王に、光に愛された者でありながら、彼の色彩は美しい月そのものであった。何よりも人目を引くのはその瞳。

どんな言葉を使ってもその美しさを完璧に表現することは出来ないだろう。星屑、いや、月色の瞳。それはきつと神竜王が流した涙。美しい、その一言でさえ陳腐に思えてしまう。

なら、信じさせてさしあげます。そう言って笑うリュシアンはとても艶やかで。神族の清廉な美しさだけではなく、どこか危うい色香を含んだ笑みに見入られる。伸びて来た指が頬を掠めたかと思うと、そつと添えられた。

あたたかい。身に纏う色彩も、生まれ持つ力も違う魔族と神族。それなのに体温は同じなのだ。いや、リュシアンの方が少し冷たいかもしれない。

「フェリシア……」

焦がれるように呼ばれた名に、フェリシアの体が震える。近付く端整な顔にぎゅっと目を瞑った。逃げ出したいのに動けなくて、出来るのは目を瞑ることだけ。柔らかな感触が、唇が髪に触れたかと思えば、リュシアンは額、そして瞼に口付けを落とす。

唇が触れた箇所が燃えるように熱い。そつと優しく、触れるだけの口付けに何も考えられなくなる。

本当に嫌なら振り払えばいい。嫌だと叫べばいい。きつとリュシアンは止めてくれるはずだ。あるいは魔術を使ったって。

そう思うのに動けなかった。心臓が早鐘のように脈打ち、頬に熱

が集まる。

フェリシアがきつく目を閉じていると、名残惜しむように唇が離れ、リュシアンが心配が遠くなる。恐る恐る目を開ければ、困ったように微笑む彼と目があった。

「続きはまた今度」

リュシアンは人差し指を唇に押し当てて微笑むと、後ろのソールを見やる。ジュリアに存在感が薄いと言われたのが相当ショックだったのだろう。未だにしゃがみ込んで、の字を書いているではないか。リュシアンの視線には気づいてもいない。

「そこの神族、今すぐフェリシア様から離れなさい」

見入らずにはいられない笑みを浮かべて仁王立ちをしているのは勿論、ジュリアである。フェリシアのために菓子をみつろついていたはずの彼女は、寒気がするほど怖い。ジュリアの周りだけ空気が凍っているようだ。

「ソー、行きますよ。ではまた……」

リュシアンは素早くソールの首根っこを掴むと、瞬く間に姿を消した。見えなくなった訳ではなく、本当に消えたのだ。フェリシアは頬を赤く染めて立ち尽くしている。

この後、ジュリアは知らないふりをしていた（単に寝ていたともいう）クロウの胸ぐらを掴んでゆすり、リュシアンがいた場所に塩をまいたのは言うまでもないだろう。

頭からまっ逆さまに落ちる直前、ソールは素早く空中で姿勢を変えて着地する。いきなりリュシアンに首根っこを掴まれたと思えばこれだ。

頭から落っこちて首の骨でも折ったらどうしてくれるのだろう。

「まっ逆さまに落ちたらそれはそれで愉快でしたが」

「は？ 何言ってるの、シアン？」

まっ逆さまに落ちる寸前でどうにか助かった友人に対して、それはないだろう。冗談ではなく、本気で残念だと笑っているのだから。ここはまだ魔族の領内、というか魔王城の城下である。リュシアンはソールを連れて城から転移した。そのまま帰ることだって出来たのに、これはわざわざ街を見て回る気だ。

リュシアンは適当にソールをあしらうと、普段は肩に流している髪を結び直し、背中に流す。最後に後ろについてあるフードを目深にかぶって歩き出した。

神族の街ならまだしも、魔族の中で彼の白金色の髪と瞳は嫌でも目立つ。対照的にソールの闇色の髪と紫の瞳は魔族の色であるため隠す必要はない。

「なー、シアン。まだ帰らないのかよ」

「帰りたいならお一人でどうぞ。私はソーが居なくても全くもって構いません」

なー、とリュシアンの服の裾を掴めば、返って来たのは冷たい言葉と黒い微笑。確かに彼ならばソールなど必要ないだろう。

例え魔族の国だろうと、身の危険が及ぶことはそうないし、何より……。

いや、それでもここで引き下がってなるものか。

「俺が構うの！ 怒られるの俺なんだぜ」

「それは気の毒に。日頃の行いが悪いせいですね」

さらりと言ったのけるリュシアンは流石だ。

神族のくせにどうしてここまで根性がひん曲がっているのか教えて欲しいものである。

「それはお前の、だろうが！」

「はいはい、そうですね」

適当に答えながらリュシアンは人々の間を縫って歩いて行く。王都であるため、通りを行き交う魔族たちは多く、活気に満ちている。威勢のよい声が飛び交い、楽しげに笑う彼らは神族や人と何ら変わらなかった。

かなりの人混みであるため、人々がリュシアンに気付くことはない。

通りにはずらりと露店が並んでおり、新鮮な果実や野菜を売る店や手作りの雑貨を売る店など、実に様々だ。

足を止めることすらないリュシアンだったが、装飾品を売っている露店が気になったらしい。露店に並ぶ品々な全て手作りの品であるらしい。しかしその腕は一見ただけで素晴らしいものだとか

った。

青いベルベットの布の上に広げられた装飾品。細工が施された指輪や見たこともない石が使われた首飾りに、アラベスク模様の金色の腕輪と実に様々だ。

どれもが素晴らしく、つい目移りしてしまう。同じものは一つとしてなく、全てが一点ものだ。そんな中からリュシアンはある物を手にとった。

銀で作られた羽根飾りに孔雀色の石が嵌め込まれた髪飾り。フェリシアの瞳と同じ色をした石を見てみると、吸い込まれそうな錯覚に陥りそうだ。まるで彼女のためにあつらえたかのよう。

「すみません、これを頂けますか？」

「はいはい、これね。ん、お兄さん、旅の人？ や、安くしとくよ！」

リュシアンから髪飾りを受け取った女主人は、彼のフードに隠された顔を見て頬を赤く染める。

顔（だけでも言う）は良いリュシアンだ。にこりと微笑み掛けられれば、世のご婦人方は卒倒するに違いない。

「ありがとうございます」

礼を言って笑い掛ければ案の定、女性は耳まで赤くしてリュシアンから視線を逸らした。

ちなみにソールはと言えばまた始まったよ、とでも言いそうな表情で親友を見つめている。

「姫さんに何か買ったのか？」

「ええ。きつとよく似合います」

ええ、と頷いたリュシアンは本当に嬉しそうだ。普段から嫌味なと言わず、そうしてくれればソールとしても非常に有難いのだが。フェリシアをからかうのも止めればいいのに、彼女を前にするとどうしてもからかいたくなるのだとか。

性格が悪いなど言おうものなら十倍返しである。その辺は結構な付き合いであるソールはちゃん理解していた。触らぬ神には祟りなし、ならぬ性格悪いリュシアンはスルーするに越したことはない、である。

「いつまでその阿呆面を晒してるんですか。さあ、行きますよ」

「おい、シアン！ おいてくな！」

リュシアンは女主人に礼を言うと、リボンをかけてもらった髪飾りを仕舞い、冷たくソールを一瞥した。そして彼の答えを聞く前に歩き出す。

気配を消しているのだろう。普段は嫌味なくらい目立つのに、彼の姿は既に人混みに紛れて見えなくなっている。置いていかれてはまた自分がどやされるだろう。ソールは慌てて白金色の青年の後を追ったのだった。

どうにでもなれ

「本当に忌々しい！ いいですね、陛下！ 塩をまかせて頂きます！」

一瞬で厨房に行って塩を取って来たジュリアは、リュシアンとソールがいたところ（特にリュシアンがいた場所を重点的）に、これでもかと言うくらい塩をまきはじめた。お陰で床が塩まみれである。ちよつとした小山が出来ているくらいだ。綺麗好きなジュリアであるが、今はそれよりもリュシアンへの怒りの方が勝っているのだろう。

「あの一、ジュリア？ ジュリアさーん」

「ご安心ください。ちゃんと消毒しますから」

「アリス、呼ぶ……」

フェリシアが呼びかけても、塩をまく手が止まることはない。とばっちりを受けて塩まみれになったクロウがぼつりと呟いた。

美人で非常に頼りになる彼女だが、リュシアンのこととなると人（というか魔族）が変わる。こうなったジュリアを止められるのはアリスティドだけだ。

「陛下、少し宜しいでしょうか？ ……ジュリア？」

いくつかの書類を手にとって来たのはアリスティドで、せっせと塩をまくジュリアを見て目を丸くした。

部屋中が塩まみれでクロウは半分ほど塩を被っている。フェリシ

アはもうお手上げだと言わんばかりに頭に手を当てていた。

「ああ、アリス。どうかした？」

「……ジュリア。そのくらいで止めてください。陛下も呆れてらっしゃいますよ。クロウ様も塩まみれですし」

一旦塩を掴む手を止めたジュリアだが、自分の暴挙には気づいていないらしい。フェリシアを大切に思う気持ちは分かるのだが、このままでは部屋一面が塩の海になってしまう。

アリスティドは、クロウの肩に積もった塩を払いながらジュリアをたしなめる。

普段は控え目な彼だが、幼なじみであるジュリアにははっきりと物を言う。長い付き合いであるからだろう。

「あら、私としたことが。申し訳ありません、フェリシア様。クロも大丈夫？」

「分かってくれたなら、それでいいんだけど。掃除は必要かも」

苦笑するフェリシアと、アリスティドに塩を落として貰いながら頷くクロウ。フェリシアにとってジュリアは優しくて頼りになって、有能な姉のような存在だ。

しかしリュシアンが絡むと暴走するのだけは何とかならないのかと、本気で思う今日この頃である。

「ではまず掃除ですね。申し訳ないですが、クロウ様の授業はその後で」

「……わかった」

流石にこの塩の中では授業は出来まい。フェリシアとてこんな中で授業はごめんだ。

風など吹こうものなら口の中は間違いなく塩でジャリジャリである。

魔王と言っても一日中、執務に追われている訳ではない。そもそもそれでは到底もたないし、倒れてしまう。フェリシアはまだ魔王となって日が浅く、アリスティドという補佐があつてこそ、魔王の勤めを果たしているのだ。

午後のお茶会はフェリシアの楽しみの一つでもある。魔王城の中にある秘密の庭園。そこは庭師の双子が彼女のためだけに作り上げ

た庭。

白や薄紅、黄など色鮮やかな可愛らしい花が咲き、石畳が敷かれている。青々とした芝生は思わず寝転がりたくなるほどだ。

蔦と花に彩られたアーチは、訪れる者を唸らせるだろう。

花園の中央に置かれた真っ白のテーブルと椅子。テーブルクロスの上にはクッキーやマフィンが入ったバスケットがあった。

フェリシアは椅子に座り、エヴァンジェリンとお茶を楽しんでいた。ジュリアはメイドらしく二人のために紅茶を用意している。

今日はエヴァンジェリンの好きなミルクティーだ。

「ううむ……。やはりジュリアのいれる茶は美味じゃのう」

「紅茶にかけては国一番ね」

ジュリアがいれてくれたミルクティーを飲みながら、エヴァンジェリンはうっとり目を細める。フェリシアもまずは香りを楽しんでから口をつけた。

宮廷魔術士である彼女だが、大抵はこうして暇を潰していることが多い。可憐な少女の姿をしているとは言え、エヴァンジェリンは偉大な大吸血鬼。

アルカード家の当主を退いた今は、宮廷魔術士と言っても隠遁しているようなものだ。

「あらあら。そんなに誉めて頂いても何も出ませんよ」

そうは言いつつもジュリアも満更ではないようで、やはり嬉しそうだ。

リュシアンが去った今、やっと訪れた穏やかな時間である。セエ

レに邪魔されることも無ければ、余計な邪魔が入ることもない。

ミルクティーを飲みながら、フェリシアはふと思い出す。リュシアンとの唇の感触を。ジュリアが塩を撒き散らしたことですっかり忘れていたが、考え出すと止まらない。

思い出さないようにしたいのに逆効果だ。

フェリシアの異変に気付いたジュリアが、彼女の名を呼ぶ。

「フェリシア様？」

だがフェリシアはティーカップを持ったまま、固まっている。

頬はうっすらと赤く染まり、孔雀色の瞳は僅かだが、熱にうかされたように潤んでいた。

「あ、えっと、その……何でもない!!」

ふと我に返ったフェリシアは動揺を誤魔化すようにティーカップを口元に運んだ。

しかし彼女の態度はどう見ても『何でもない』訳がなく、ジュリアにもエヴァンジェリンにもばれなかった。

フェリシアがここまで動揺するのはリュシアンすることに違いない。残念ながら二人ともフェリシアより一枚も二枚も上手である。

「陛下、いえ、フェリシイ様。隠さなくても分かります。あの性悪神族のことですね？」

「わらわに隠し事をしようなど五百年早い」

ずい、とフェリシアに詰め寄るジュリアと優雅にお茶を楽しむエヴァンジェリン。

勿論、二人には口が裂けても言えない、絶対に言えない。仕方なく、どうにかして誤魔化そうとするが、

「何というか具体的な年数で……」

「と言うことはやはり、リュシアン関連ということか」

「あら？ エヴァンジェリン様、分かりきっていたことでは？」

二人が猛烈に怖い。あまりの怖さに、フェリシアは無意識に椅子を後ろに動かした。なんというカリュシアンはわざと嫌われるような態度を取っている。ジュリアやエヴァンジェリン、ローウェルには。

ただの気まぐれや、面白いから、という理由かもしれないが、何故だか疑問に思ったのだ。

「それくらいで許してあげて下さいよ」

「そうですよー。姫様がかわいそうです」

とその時、フェリシアには有難い助けが入った。にこにこ笑っているのは瓜二つと言っても過言ではない少年少女である。

少年の方は、短いリーフグリーンの髪に大地を思わせる茶の瞳。半袖のシャツに青いズボン。肘まである白い手袋は少し土で汚れていた。おまけに頭からは猫のような耳が生え、後ろには二つに別れた尻尾がある。

もう一人の少女も少年と同じ瞳の色に耳と尻尾まで。髪もリーフグリーンだが、彼より少し長く、耳の下辺りで左右とも三編みにしていた。

纏う服装は半袖のシャツに、これまた裾の部分がリボンで縛る形になった青い半ズボン。少年とは少し違い、肘まであるレースの手袋をつけていた。

「リーフ、リリース！」

『ごきげんよう、陛下』

思わぬ助っ人に、立ち上がったフェリシアの声が弾む。
彼女のためにこの庭を作り上げた庭師の双子は手を繋ぐと、膝を折り、優雅に礼をした。

「あの腹黒神族の肩を持つとでも？」

「まさか」

「ジュリア様、怖いですよー」

にこやかに、だが絶対零度の微笑みを向けるジュリアに怯むことなく笑みを浮かべる少年と少女。

男女の差異を除けば瓜二つの彼らは、まず双子なのだろう。

「ジュリアはフェリシアのこととなると必死じゃからな」

「当然です。本来ならお側に寄らせるものですか。思い出したら余計に腹が立って来たというもの」

こんな時だけ“大人”なエヴァンジェリンに殺気を撒き散らすジュリア。

しかし彼女はどこから見ても笑っていた。その美しいライトグリ

ーンの瞳を除けば。

フェリシアはかわいた笑みを漏らすことしか出来ない。過激なメイド長には触れないのが一番だ。

「貴方たちもどう？ 今日特別にいられてもいいわ」

『勿論、頂きます』

新しいティーセットの用意を始めたジュリアに、双子は迷うことなく頷いた。ジュリアの紅茶は絶品である。

だがジュリアが怖いのはフェリシアの気のせいだろうか。紅茶をいれていると言うより、魔女が怪しげな薬を調合する、の図にしか見えない。

「それにしても、最近は本当に賑やかになりましたね」

「リュシアン殿のお陰ではないですか？」

何気なく紡がれたリーフ（兄）の言葉に空気を読まずに答えるリース（妹）。

途端、ティーポットを持つジュリアの手が震えた。これは非常にまずい。まずいが、どうすればいい。

「ふうむ……。本気でアリスを連れて来るかのう」

「そう言うならエヴァが止めてよね」

「知らん。それを言うならフェリシアが止めれば良いだろうに。とばっちりはおめんじゃ」

皿に盛り付けられたクッキーを口に運び、のほほんと紅茶を啜るエヴァンジェリン。そんな彼女の耳元でフェリシアが囁くが、面倒には関わりたくないらしい。

「ねえ、ジュリア。リュシアンのことなんてどうでもいいから、気にしないで」

「フェリシア様がそう仰るのなら……」

仕方なくフェリシアは笑顔がひきつらないように気をつけて、ジュリアに笑い掛ける。

どうにかなったか、フェリシアが内心で胸を撫で下ろした瞬間、リースから余計な一言が。

「そう言えば今日はリュシアン殿、いらしてませんね」

あまりに高度なスキルを持つリースにリーフは頭を抱え、ジュリアは地の底から響くような笑い声を発している。

もうどうにでもなれ、そう思ったのはフェリシアもエヴァンジェリンもきつと同じだろう。

大好きな人

己の体すら見えぬ深淵。深い闇の中に自分はいた。何も見えない、聞こえない。一切音のない世界は苦痛でしかなかった。

それなのに時折、聞こえるのだ。頭の中に響く声。それは深く暗い、怨嗟の声だった。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ！

誰を？ 何のために？ そんな疑問など沸かなかった。声に従えば楽になれる。そう信じて。

それからどれくらいの時が経っただろう。闇しかなかった空間に一人の少女が現れたのは。

毛先の方だけ緩く波打つ髪は、優しい薄紅色で、こちらを見据える瞳は艶めく孔雀色。整った顔立ちをした可憐な少女。

ほっそりとした彼女の手が自分に伸びる。もし少女が敵意、あるいは殺意を持っているのなら、その手ごと食いちぎってやるつもりだった。

しかし、次に訪れたのは暴力でも魔術でもない。何を思ったのか、彼女はそっと自分の頭を撫でたのだ。

牙をむき殺気を撒き散らす自分を恐ることなく。

「怖がらないで。もう大丈夫。誰も傷つけなくていい。さあ、“目を開けて”」

優しい声が自分を世界へと誘った。視界がクリアになり、闇が晴れる。

もう自分をいましめるものはなく、どこへだって飛んでいける。

忌まわしい鎖を絶ちきってくれたのは、他でもない薄紅色の髪をした少女だった。

空を飛ぶのは好きだ。混じりけのない青く、美しい空と一体になれるような気がして。

頭上を鳥達が横切って行った。この姿が珍しいのか、興味津々といった様子はどこかわいらしい。

澄み渡る蒼に映える銀とも紫とも言えぬ幻想的な生物。それは“

竜”だった。

日差しを反射して煌めく藤色の鱗は光の加減によって銀色のようにも薄い紫にも見える。

猫のような縦長の瞳孔をした瞳は光を封じ込めた紫水晶。広げられた翼はまるで、星屑を集めたビロードのカーテンだ。

城を出て丁度三日になる。大好きな彼女は困っていないだろうか。眼下に見えるは彼女が守る街。黒塗りの城を中心として広がる街は活気に溢れていた。

遙か上空からそれを眺めていた竜は、瞳を閉じて体を丸める。刹那、淡い光に包まれたはずの竜はなく、背に煌めく皮膜の翼を持つ女性がいた。

見た目だけなら二十歳ほどだろうか。両肩が剥き出しになった白い装束に、長い袖は先に行くにつれて広がっている。蝶を思わせる帯は彼女の瞳と同じ紫で、ゆったりと波打つ白のスカートがひらひらと風に揺れた。

目的地は目の前。考えただけで心が踊る。彼女は迷うことなく、そして気持ちよさそうに空を泳ぎ、大好きな“あの人”の元へと向かった。

風に乗り、ゆっくりと翼を羽ばたかせる。いくつもある城の窓の一つ——最も高い場所にある窓まで来ると、彼女はこんこん、と硝子張りの窓を叩き、部屋の中の人物に自分の来訪を知らせた。それから数秒後、中から窓が開けられる。

「おかえり、ディオネ」

彼女をディオネ、と呼んだのはまだ十代半ばから後半ほどの少女

だった。毛先だけ緩やかに波打つ長い髪は柔らかな薄紅色で、ディオネを見る孔雀色の瞳はどこまでも優しい。

ディオネは彼女が大好きだった。彼女が、フェリシアが自分を暗闇から解き放ってくれたのだから。堪えきれなくなったディオネはフェリシアの胸に飛び込んだ。

「ただいま、フェリシア！」

「わ！　ディ、ディオネ！　う、動けない……」

ダイブして来た自分より大きな相手を支えることなど、フェリシアが出来るはずもなく。二人はそのまま床に倒れこむ形になった。

一応女性の姿をしているとは言え、彼女は竜であるし竜の力は半端ない。いくら魔族で魔王であると言ってもフェリシアは腕っ節が強い訳ではないからだ。

ばたばたと足掻いても、ディオネは全く気づいていない。

ぎゅっ、とフェリシアを抱き締めて頬擦りをしているではないか。まるで親鳥に甘える雛のようだ。

「フェリシア、フェリシア、聞いてくれ！　空を飛ぶのは楽しいんだ！　フェリシアも一緒に飛ばないか？」

「それより、ディオネ。先に、退いて……」

苦しいどころの話ではない。窒息死しそうだ。消え入りそうな声を聞きとったディオネは慌ててフェリシアを解放した。

どうにかディオネの手を借りて立ち上がったものの、息も絶え絶えである。

「す、すまない……！ 怒ってないか？」

「怒ってない。でもちゃんと加減は考えて」

フェリシアは少し背伸びをしてディオネの頭を優しく撫でた。嬉しそうに目を細めたディオネは猫のよう。彼女の生い立ちを考えるとあまりきつくは言えない。

今でこそ天真爛漫な少女のようなディオネではあるが、彼女は魔族でも無ければ神族でもない。魔族と神族の血から作られた神魔とも呼べる存在である。

先代の魔王の時代の話だ。禁断の研究に手を出したある宮廷魔術士が城を追放された。その魔術士は魔王に激しい憎悪を募らせ、やがて一つの存在を作り出す。

それがある意味では魔族であり神族でもあり、そのどちらでもないディオネだった。

しかし魔術士はフェリシアとローウエルの手で捕縛され、彼女は魔術士の呪縛より解き放たれた。ディオネは自分の意思でフェリシアのそばにすることを選んだのである。

今でこそ女性の姿を取ってはいるが、本来ディオネには性別はない。魔王城に來たばかりの頃は不安だったためか、少年の姿をしていたくらいだ。

そんな訳で彼女には“女”としての自覚がない。これっぽっちもない。流石に誰彼構わず抱きつくことはしないが、慎みを教えるのは大変だ。特にジュリアが、だが。

「……もしかして、仕事の邪魔をしてしまったか？ すまない」

「全然邪魔じゃないから大丈夫。ちょうど休憩しようと思ったところ

ろだし。ジュリアがお茶を用意してくれてるから一緒に飲む？」

とフェリシアが言うのと直ぐ様うん、と元気な声が返ってくる。ついさっきまでしゅんとしていたのだが、それが彼女らしさなのだろう。休憩しようと思っていたのは本当だ。

ジュリアが気をきかせてお茶とお菓子を用意している最中にディオネが帰って来たのである。ジュリアならディオネの行動を先読みして、彼女の分まで準備しそうではあるが。

その直後、嬉しそうに笑っていたディオネの耳がぴくりと動く。

「む、むむ……」

「フェリシア様、あなたの愛の奴隷セエレが参り……ぐふう！」

刹那、無駄に光を背負ってセエレが現れる。

しかしながら彼がフェリシアの元にたどり着くことはなかった。にこにこ笑うディオネに殴り倒されたからだ。

ちなみに彼女に悪気は全くない。

「ディ、ディオネ。相変わらず良いパンチ……」

「おお、なんだ、セエレ。もっと遊ぼう」

はは、とかわいた笑みを浮かべるセエレの肩を掴んでガクガクと揺さぶるディオネ。何を勘違いしたのか、ディオネにとって彼は殴っているもの、になっているらしい。

ディオネにしてみれば遊びでしかないのだろう。

しかしいくらセエレが頑丈でも竜の力で殴られれば当然痛い。リウシアンやディオネの一撃を受けて大怪我をしないのは、彼が気の

扱いに長けているから。

人は魔術や神術は使えないが、代わりに体内や周囲の気を操る気術を使うことが出来る。

それによって魔術や神術に似た効果を発生させているのだ。いくらセエレが頑丈と言っても彼は人間。気術を使って身体能力を強化しなければ、とても彼らの力に耐えられない。

ちなみにフェリシアはと言えばその隙にたまった書類を片付けていた。

これ以上、アリスティドに迷惑を掛けるわけにはいかないし、特にディオネが帰って来ると書類どころの話ではないのだ。

「う、ぬぬぬ……。これも愛の試練。フェリシア様を思えばこれくらい……！」

「なんだそれは。愛の試練？ 食べられるのか？」

全くもって噛み合わない二人は以前としてじゃれ合い？ を続けている。個性的な面々の適当なあしらい方を身につけなければとても仕事はかどらない。

しばらくして戻って来たジュリアに、ディオネとセエレはこっそり絞られたのだった。

銀細工の蝶

ディオネはフェリシアが大好きだ。彼女が自分に名と光を与えてくれた人だから。彼女に出会わなければ、ディオネは本能のみに従う獣でしかなかっただろう。

頭の中に響く声だけに従い、人々を殺した。罪悪感など感じない。彼らを殺せば声が聞こえなくなるのだと信じていた。

けれど、フェリシアから光と名を与えられて初めて、ディオネは己の罪を知ることになる。魔術士に命じられるまま命を奪った。何てことをしてしまったのか。

それでもフェリシアは決してディオネを責めることはなかった。

魔王城にいることを許してくれた。居場所を与えてくれた。そんな彼女が大好きだ。彼女に仕える魔族たちも。ディオネが実験により産み出された竜であり、禁忌とされる存在であっても彼らは受け入れてくれた。

黙々と書類をこなすフェリシアをディオネは足を組み、太股の上で片肘をつくと、顎に手を添えて彼女を眺めている。ついさっきまでいたセエレはジュリアに追い出された。ディオネも邪魔をしないという条件つきでこの部屋にいる。

体を動かすことが好きなディオネにとって、本当はただ眺めているのは苦痛に近い。

しかしフェリシアは飽きないのだ。ずっと見ていたいと思う。神族でありながら彼女にご執心なリュシアンもそうなのだろうか。

ジュリアが用意してくれたクッキーをつまみつつ、じっとフェリシアを眺める。書類に没頭しているのか、ディオネの視線にも気付いていないらしい。

「……誰か私と遊んでくれないのか」

しかしながら基本、退屈はディオネの天敵だ。フェリシアを見ていただけいいのだが、彼女も書類に夢中で構ってくれない。ジュリアやアリスティドは当然忙しいだろうし、クロウも同様だ。

エヴァンジェリンは魔王城にいない上に、どうやら夫といちゃいちゃしているらしい。ローウェルはまずディオネとは遊ばないし、仕事がある。フレディも同様だ。

庭師の双子もそうだし、そうなればセエレか彼の愛犬ということになる。

しかしセエレはセエレでこちらに反撃してこないため、退屈と言えば退屈だ。何とかそれがセエレのポリシーらしい。

「むー……」

「……ディオネ。あたしのことはいいから、退屈なら街に出たら？」

顔を上げたフェリシアは、退屈そうにしていたディオネに気付いていたようだ。遊ぶ相手がいないのなら、街に行ってもいいと言ってくれている。

神族でもありながら、藤色の髪に紫の瞳を持つディオネはまず魔族に見えるため問題はない。まあ、彼女を一人で放り出すのは色々心配ではあるが。

「フェリシアという方がいい」

退屈は確かにディオネの最大の敵ではあるが、折角帰って来たのだから彼女のそばにいたい。

ディオネの居場所がフェリシアのそば以外考えられないのだから。遊び相手がいなくても我慢出来る。

「そう？ 本当に？」

「フェリシアと一緒にいい！」

紫色の瞳を煌めかせ、満面の笑みを浮かべるディオネ。外見はフェリシアより年上だというのに、その言動は幼子のよう。

実際、彼女は生まれてから数年ほどで、子供と同じなのだ。

ディオネのためにもそろそろ一段落をつけようとした時、銀色の光が視界をよぎった。

「こんにちは、フェリシア」

「リュ、リュシアン……」

陽光を弾く銀の髪、月色の瞳。神竜王グランミュリンに愛された者でありながら、月光の化身と呼ぶにふさわしい青年だった。

銀糸のような睫毛も、形の良い唇も。良い意味で現実味がない。一瞬にして現れたのは紛れもない神族の青年。何故だかフェリシアに興味を持つ彼は、そっとフェリシアの髪に触れた。

「よく似合います」

「ずるいぞ。私にはお土産がないのか？ リュシアン」

「え？」

よく似合います、と微笑むリュシアンに唇を尖らせるディオネ。フェリシアには何が何だか分からない。

リュシアンはそんなフェリシアの言葉には答えず、勿論ディオネ

にもありますよ、紙袋を彼女に手渡した。

「おお、フェリシアだ！」

「はっ？」

ディオネが取り出したのは、饅頭である。ただし、饅頭ではあるが、ただの饅頭ではない。ジュリアの一存（とは一概にも言えないが）で販売されている銘菓魔王饅頭である。

しかしながら、フェリシアにしてみれば自分の顔が目前にあるのはあまりいいものではなかった。

綺麗な薄紅色の饅頭はちょうど手のひらサイズで非常に可愛らしい。クロウが（ジュリアの半ば強制的なお願いで）製作を指揮しているだけある。味も言うまでもなく美味だ。

「その髪飾り、よく似合ってるな」

「でしょう。ディオネも中々見る目がありますね」

饅頭を頬張りながら、うんうんと頷くディオネと、得意げに微笑むリュシアン。

壁に取り付けられた鏡を見ると、髪に輝く銀細工の蝶がとまっている。

孔雀色の石が嵌め込まれたそれは花にとまった蝶そのもので、今にも飛び立ちそうだ。生き生きしているのに、繊細な羽根は触れれば壊れてしまいそう。儚くも美しい蝶そのもの。

「これ……」

「城下で見つけたんです。お気に召しましたか？」

フェリシアは驚き、鏡を見つめている。リュシアンはと言えば、悪戯が成功した子供のような無邪気な笑みを浮かべていた。

フェリシアは魔王だ。贈り物なんて山ほど贈られたことがある。美しい宝石、高価なドレス、靴や首飾りだって。

それでもリュシアンが自分のために選び、贈ってくれた髪飾りには敵わない。孔雀色の石はフェリシアの瞳に合わせて選んでくれたのだろう。

今まで贈られたどんな宝石より輝いて見える。高価であるとか、そんなことは関係ない。それはきつとリュシアンが“自分のために”選んでくれたから。

「気に入りませんでしたか？」

「え、いや、その……ありがとう、リュシアン」

表情を曇らせるリュシアンに、フェリシアは慌てて首を振る。素直に礼を言うのは恥ずかしくて悔しいが、礼を言わないのは魔王として頂けない。無理矢理にでもそう思うことにしたが、それすらもリュシアンの思惑の内だとフェリシアは知りもしないだろう。清廉潔白な神族とは思えない所業である。

一言も喋らないディオネはと言えば、饅頭を眺めつつ、口一杯に頬張っていた。何せ、お菓子には目がないディオネだ。大好物はクロウが作るプリンではあるが、饅頭もお気に召したらしい。

「それは良かった。おや、今日はジュリア殿はいらっしゃらないようですね」

「白々しい。気配を消しているからだろう……！」

わざとらしく周囲を見回し、くすりと微笑むリュシアン。本当に邪魔されたくないのなら、気配を消して来ればいい。

リュシアンはいつだって、ジュリアたちに分かるようにわざと気配を消さずにやって来る。

「逢瀬には無粋でしょう？」

「なんだ、私は入ってないのか」

しっ、と形の良い唇に人差し指を当て、フェリシアの手を取るリュシアンにディオネからつつこみが入る。

彼にしてみれば饅頭を頬張るディオネなど、邪魔の内にも入っていないらしい。

「い、いいから離せ……！　ち、近い近い……！」

「そんなに逃げなくてもいいでしょう？　私を焦らすおつもりですか？」

じりじりと追い詰められていくフェリシア。顔を真っ赤に染めるフェリシアと艶やかな笑みを浮かべるリュシアン。どちらが優位かは言うまでもない。

ディオネが止めないのは、リュシアンを気に入っているからだし、フェリシアが本気で嫌がっていないから。もし彼女が嫌がっていたなら、ディオネは殴ってでも止めている。

神王の使者

ディオネの目から見てもフェリシアは本気で嫌がっているようには見えなかった。

口ではああ言っているけど、彼の事を嫌ってはいないからだし、彼女は意外に押しに弱い。リュシアンもそれを知っているから、いつもああやっているのだろう。

本当はディオネだってリュシアンに大好きなフェリシアを取られるのは気に入らない。

けれど、彼も好きだし、フェリシアの事を考えると下手なことは出来なかった。

ディオネの頭の中は大体、お菓子と遊ぶこととフェリシアのことだけだが、ちゃんと考えているのだ。

ジュリアが置いて行ってくれたお茶を自分で注ぎ、ずっと音を立てて飲み干す。

「美味しい……。私はどうすればいいんだ……。？」

右手に湯のみ、左手に饅頭を手にしたディオネは眉をハの字に歪めている。

普段は血相を変えてやって来るジュリアも気づいていないようだし、気配に敏感なはずのローウェルやクロウも来ない。

魔王城に強固な結界を張っているエヴァンジェリンもだ。もっとも彼女の場合は案外、知らぬふりをしているのかもしれないが。

ディオネが思案していると、とん、と何かが壁にぶつかる音がした。フェリシアである。彼女は壁とリュシアンに挟まれる形になっていた。

白い頬は薔薇色に染まり、視線は宙を泳いでいるのではないか。

「リュシアンも人が悪い。ん？　この場合は神族か？」

リュシアンがフェリシアを気に入っていることは分かる。フェリシアが彼を嫌っていないことも知っている。

だがこのまま放っておいていいものか。いや、何だか嫌な気がした。果たしてどうしたものか。

「本当によく似合います。貴女は蝶のような人ですから、いつも私の手からすり抜けてしまう。どうすれば繋ぎ止めておけるか、是非教えて頂きたいものですね」

フェリシアの髪を撫でたリュシアンは、彼女の髪を一房とって恭しく口づける。王子が姫君にするように。

洒落たことを堂々し、尚且つ悔しいくらいに似合うのは神族でもリュシアンくらいだろう。

フェリシアはそんな彼の手管にお手上げ状態なのか、目を回し、顔を赤くしてあうあうあう……と呟いていた。

恥ずかしい言葉を素面で、さらりと言える彼に賞賛をおくりたい。流石にこれ以上はフェリシアがかわいそうだ。湯呑みを置き、饅頭を口一杯詰め込んで立ち上がろうとする。

しかしそんなディオネより早く、乱暴に扉が開け放たれた。

鬼の形相で飛び込んで来たのは勿論、ジュリアである。両手が塞がっているため、どうやら蹴破ったらしい。吹き飛ばされた扉が無惨に床に倒れていた。

右手でフレディ、左手でソールの首根っこを掴んでいる彼女は、息一つ乱れていない。

普段は穏やかな光を宿す薄緑の瞳も今や怒りのせいか、剣呑な光を湛えている。

「フェリシア様から離れなさい、今すぐに。それとお返しします」

言うなり目を回しているソールをリュシアンに投げつけた。

どうやら彼女がここに来たのはリュシアンの気配を感じたからではなく、ソールが原因らしい。彼はいつもリュシアンを連れ戻しにやって来るのだから。どうせ二人して愚痴を言い合っていたところをジュリアに見つかったに違いない。

リュシアンは滑るようにフェリシアの前に出ると、すっ、と右手を翳す。

すると、見えない壁に弾かれたようにソールの体が不自然に床に落ちる。びたん、と盛大な音を立てて。しかも顔面から。控え目に言ってもかなり痛そうだ。

「ディオネ！ 貴女は何をしていたの？」

「ジュリアも食べるか、饅頭。美味しいぞ？」

「食べません。貴女って人は……」

ジュリアの怒りの矛先は、まずディオネに向いたらしい。すっかり餌付けされ、満面の笑みを浮かべるディオネにジュリアの頬がぴくぴくと動く。

笑っているのに目が笑っていない。思わず顔がひきつるディオネにジュリアは、目を回しているフレディを投げた。

ぽーん、と宙を舞う少年。

「ディオネ、フレディとでも遊んで来なさい。さあ、早く」

「うう……ジュ、ジュリア、ひどい」

「なんだフレディ。私と遊んでくれるのか。なら早く行こう」

遊んで来なさい、その一言にディオネの紫の瞳が輝く。

へろへろになったフレディを連れて彼女は上機嫌で部屋を出て行った。鼻歌を歌いながら、リュシアンのお土産である饅頭を頬張って。

「そんなに睨まなくてもすぐに離れますよ」

「あ……」

すぐそばにあったリュシアンの体がフェリシアから離れる。思わず口をついて出た声。これではまるで名残惜しいようではないか。

そしてリュシアンがそれを見逃すはずがない。首を傾け、艶やかに笑う。

「寂しいですか？」

「寂しくない！」

きつ、と睨み付けるその顔でさえリュシアンを魅了して止まない。フェリシアはきつと知らないのだろう。自分がどれだけ他人から見られているか。

ジュリアはフェリシアとリュシアンのやり取りに我慢の限界が来たらしい。彼女の迫力と言ったら、慣れているはずのフェリシアでさえ後退りするほどである。とは言え、リュシアンは平気らしく、澄ました顔でジュリアを見返していた。

「貴方はよほど私を怒らせたいようですね」

「まさか。そんなことはありませんよ」

見惚れそうな笑顔で睨み合う二人。

まだ怒っている方がいい。下手に笑顔だからこそ恐ろしいのだ。流石のフェリシアも今のリュシアンとジュリアの間に割って入ることは出来なかった。

ちなみに二人の足元ではソールが俺の扱いって酷いよね、と顔をひきつらせながら呟いていた。思いきり床に叩きつけられたせいか、彼の顔は真っ赤になっている。

「私に喧嘩を売るなんていい度胸です。一度痛い目に合わなければ分からないようですね」

「喧嘩を売るなんてとんでもない。出来ますか、貴女に？」

触れ合うのではないかと思わせるくらい顔を近づけ、笑い合う、正しくは睨み合うジュリアとリュシアン。

フェリシアのこととなるとジュリアは周りが見えなくなる。リュシアンはそれを知っていて、わざと彼女を挑発しているのだ。貴女に出来ますか、と。

「ちよっ、ちよっとソール。何とかして」

フェリシアは倒れているソールを引きずってしゃがみこむと、そっと耳打ちする。何とか言うか自分のことで揉めているから、間に入りづらいのだ。

何とかして、とフェリシアが助けを求めると、ソールは非常に嫌

そんな顔をした。

「無茶言うなよ、姫さん。死刑宣告に等しいぜ。あの二人が容赦すると思うのか？」

「思わないけど。半殺しで済むかなって」

「洒落にならないから！ 俺死ぬよ！？」

えへへ、とフェリシアが笑えばソールは一気に元気になったのか、勢い良く上体を起こした。

神族にはあり得ない紫水晶の瞳には紛れもない恐怖が見え隠れしている。とそこへ、アリスティドが息を切らせて飛び込んできた。

蹴破られた扉と睨み合う二人を見た彼は真っ青になる。

「ジュリア、また貴女は……」

「ご心配には及びません。アリスティド殿。起きなさい、ソー。残念ながら今回はジュリア殿と遊びに来た訳ではありません。私とソーは神王陛下の使者として参りました」

そう言うリュシアンの表情は普段と変わらない。その声も。だからこそリュシアンの口から出た神王陛下、の一言は酷く彼に不似合っていた。

神王陛下。とてもリュシアンの口から出たとは思えない名だった。権力や地位など、色々なしがらみとは対極にあると思っていたから神王、文字通り神族を纏める王。リュシアンとソールが神王の使者だという。良い意味でも悪い意味でも神族らしからぬ二人が。

神王陛下の使者、その一言にアリスティドが目を伏せ、ジュリアは険しい顔になる。

「……どうということ？」

そんなつもりはないのに、こぼれ落ちた声は硬い。

リュシアンがフェリシアに会いに来るのは神王のためなのだろうか。きっとそうに決まっている。

分かっていたはずなのに落胆している自分自身が一番嫌だった。

神族が好んで魔族に近寄るはずがない。

そんなフェリシアの僅かな異変に気づいたジュリアはリュシアンを睨みつける。

「返答によっては貴方を許すわけには参りません。覚悟は出来ているのでしょうか？」

彼女にしては低い、魂まで凍りつくような冷たい声だった。

フェリシアを何よりも大切にしているジュリアである。リュシアンの返答によっては何をしでかすか分からない。静かであるからこそ余計に。

薄緑の瞳は完全に据わっていた。

「ジュリア、落ち着いて下さい……」

「私は十分落ち着いているわよ」

アリスティドが慌ててジュリアの前に立ちふさがるが、にべもなく返される。

彼女のあまりの迫力にソールは縮み上がり、顔をひきつらせていた。影が薄い、と言われたことがショックだったのだろう。

「神王陛下の件とフェリシアのことは関係ありません。信じて頂け

ないでしょうが……」

「当たり前です。信じろと言う方が無理でしょう？」

リュシアンは今回のこととフェリシアのことは関係ないと言う。

しかしジュリアから返ってきたのは冷ややかな言葉だった。フェリシアはリュシアンの顔を見ることが出来ない。怖い、のだろうか。

「……分かりました。では本題に入りましょう。フェリシア、いいえ、魔王陛下。神王陛下より賜ったお言葉をお伝えします」

小さく嘆息したリュシアンは真剣な表情になると、フェリシアの前で膝を折った。

フェリシアはそれをなんとも言えない気持ちで見下ろしている。

何故こんなにも胸が痛いのだろう。裏切られたから？

そもそもフェリシアとリュシアンは、魔族と神族。裏切るも何もないではないか。

フェリシアの目には今の彼が知らない人物に見えて仕方なかった。

魔王として

神出鬼没の神族。それがフェリシアが抱くリュシアン印象だった。

何を考えているのか全く読めない変わり者。彼がジュリアやローウェルと互角以上にやり合うのは知っている。

神族でありながら、好戦的で口の悪い彼。

素性が気にならなかった訳ではない。むしろ警戒すらしていた。なのになにの間にかりュシアンはフェリシアの心の中にいたのだ。

怖かったのかもしれない。知れば彼が自分の元から去ってしまう気がして。

フェリシアは魔王だ。神族一人に心を乱されるなんて許されない。未熟だから、では済まされないから。

息を吸い込み、意を決して口を開く。

「……その前に教えて。リュシアンは何者なの？」

「私は私ですよ」

普段と変わらぬ声で返された言葉。静かな笑みを湛えて彼は言った。

私は私？ リュシアンという名すら、本当の名ではないくせに。心の中で笑うフェリシアがいる。

「答えになってない」

「“答え”ですよ。私は神族で、私以外の何者でもありません。勿論、貴女が望むなら何でもお答えしますが」

孔雀色の瞳を細め、睨み付けて来るフェリシアにリュシアンは妖しく笑う。

綺麗な顔だって見慣れているはずなのに、落ち着かない。これもいつもの冗談だ。

その時、今まで黙っていたジュリアが二人の間に割って入った。

「それで早く神王陛下の用件を言いなさい。フェリシア様に触れることを許した訳ではありませんよ」

「ええ、分かっていますよ」

フェリシアに触れようとした彼の手を掴もうとしたジュリアだったが、寸でのところで避けられる。

それが彼女には気に入らない。忌々しいと言っていいだろう。リュシアンはジュリアがずっと大切にしていた来たフェリシアを奪おうとしているのだから。

「我ら神王陛下の居城をご存知ですか？」

「パレスですね」

「流石はアリスティド殿。その通りです」

おずおずと口を開いたアリスティドにリュシアンはふわりと微笑む。

神王の居城。パレス、とは略称で、本来の名はライトパレス。古代アースヘルヴ語で光の宮殿という意味だ。

神王は一日中、パレスで神竜王に祈りを捧げているという。

何故なら彼ら神族は皆、神竜王に仕える聖職者のようなもの。中

でも神王はグランミュリンの神子でもある。

しかも魔王や神王は基本、本来の名を口にするのではない。つまりフェリシアたちは神王の性別はおろか、名さえ知らなかった。

「それでそのパレスがどうしたっていうの？」

「貴女をパレスにお招きしたい。神王陛下はそう考えておられます。こちらが正式な書状です」

そう言ってリュシアンが取り出したのは、仰々しい筒に納められた一枚の紙。

金箔によって飾られた紙には、流麗な字でリュシアンが口にしたことと概ね同じ事が綴られている。

神王の名に正式な印まで押されているではないか。

リュシアンのたちの悪い冗談ではなく、この書状は本物だ。

「……一体どういうことですか？　神王陛下は何を考えてらっしゃるのです。それに不躰ではありませんか。フェリシア様にお会いしたいのなら、神王陛下が我が国に訪問されるのが筋というものではないでしょうか？」

不信任を露にしたのは言うまでもなくジュリアである。

何故、神王がフェリシアをパレスに招きたいのか。顔を合わせたことすらないというのに。

同じ立場であるはずなのに、神王がフェリシアを招くとはどういうことなのか。

「そんなこと言われてもなあ、忠犬ちゃん。陛下は神族の地から出られないんだって」

「そして私たち如きでは、神王陛下の御心を推し量ることなど出来ません」

若干怯えながらも首を竦めるソールに、秀麗な美貌を曇らせるリユシアン。つまり自分たちはあくまで使者であり、知りたいのなら直接会って聞けということだろう。

しかしながら、魔族と神族の間にある溝は深い。大きな戦こそないが、小競り合いなら数え切れないほど起こっているのだ。

魔族が神族を嫌っているように神族も魔族をよく思っていない。だというのにフェリシアを招きたいとはどんな思惑が絡んでいるのか。

あのアリスティドでさえ、険しい顔をしているほどだ。

「どうされますか、フェリシア？ 受けるか、それとも断るか。貴女の自由です」

自由ということは断ることも出来るのだろう。普通に考えれば、フェリシアがパレスに赴く必要はない。

長らく争い、戦場以外で顔を合わせることもなかった魔族の王と神族の王が相對する。

リユシアンや神王の真意がどこにあるのか、フェリシアには分からない。

だが今、魔王としてすべきことはなんだろう。

「正式な書状があるのなら、あたしに……私に断る理由はない。第二十四代魔王、フェリシアⅡレグラメントⅡラインフォルトの名において、神王陛下の招待をお受けしよう」

「へ、陛下！」

「それが陛下のお考えなら」

驚き、後ずさるジュリアに、顔色は悪いながらも頭を垂れるアリスティド。

リュシアンは相変わらず微笑みを浮かべているし、ソールは口をあんぐりと開けていた。

平然としているのはフェリシアとリュシアンだけ。

魔王がパレスに足を踏み入れたことは未だかつてない。ジュリアが呆然とするのも当然だ。

「ごめんなさい、ジュリア。でもこれは正式な招待だし、魔王として行かないと。それにあたしはお飾りの王じゃない」

ごめんなさい、と謝ってジュリアを見据える。魔王としてまだ未熟であることは、フェリシア自身が痛感していること。フェリシアに不満を持つ貴族もそれなりにいる。

魔王とは名ばかりの魔力が高いだけの小娘だと。

確かにそうだ。皆の助けがなければ、とても魔王ではいられないのだろう。それでもフェリシアはお飾りの王でいるつもりなどなかった。

今の内に好き勝手言わせておけばいい。

「……ジュリア」

「私だって分かっているのよ、アリス。……陛下の仰る通りです。申し訳ありません。メイド長失格ですね」

アリスティドが案じるようにジュリアを見る。彼が異を唱えなかったのは、フェリシアの判断が正しいと感じていたから。

ジュリアだって分かっている。否、分かっていたつもりだった。

全てフェリシアの言う通り。

神王やリュシアンと思惑が何であるにせよ、正式な招待である以上は無下に断ることは出来ない。

フェリシアをお飾りだと笑う者もいる以上、国内の貴族にだってなめられる訳にはいかないのだ。

ジュリアはそんな者たちからフェリシアを守ろうと必死で、周りが見えていなかったのかもしれない。いつまでも小さなフェリシアではないのだ。彼女はジュリアが仕えるべき“王”。

「そんなこと言わないで。ジュリアがいてくれるから、あたしは頑張れるの」

「貴女はよくやっていらっしやいますよ」

「フェリシイ様、ありがとうございます。……ですが、その神族。貴方に慰められたくはありません、余計なお世話です」

項垂れるジュリアを励ましたのはフェリシアと、なんとリュシアンだった。途端に不機嫌になった彼女はいつものように彼を睨み付ける。

するとリュシアンは、それでこそジュリア殿です、と肩を揺らし、笑った。

元老院

フェリシアとアリスティドを含めた九人の男女が、円卓を囲んで座っていた。

一見して高級そうな生地に金糸、銀糸の刺繍が施された衣装を身につけた彼らは明らかに貴族であろう。

黙ってフェリシアの話を聞いていた彼らだが、先に口を開いたのは二十歳ほどの青年である。

「――なるほど。それが陛下のお考えなのですね」

肩に届くほどの薄紫の髪に、鮮やかな真紅の瞳。抜けるような白い肌に、金糸の縁取りがなされた黒の外套を纏っていた。

名はレックスⅡアルカード。その名は古の言葉で『王』を表す。現に彼は実質的な吸血鬼の王であり、惑のアルカード家現当主でエヴァンジェリンの実の息子である。

元老院。七大貴族から構成される王の助言機関。世襲制であり、代々七大貴族の当主がその任を引き継ぐ。エヴァンジェリンも当主であった頃はこの場にいたということだ。

七大貴族はフェリシアの実家である魔のレグラメント家を始め、智のファリエール、惑のアルカード、妖のクズノハ、幽のヨルハ、爪のウールヴヘジン、鱗のウィーヴィル、詠のフォニアが存在する。

「しかし危険ではありませんか？」

「詠よ、そなたの言うことはもっとも。神王の真意は分からぬ。だが陛下のお考えを尊重することが大事ではないか？」

表情を曇らせるのは、輝く金の髪と蒼海を思わせる蒼の瞳を持った女性。

そんな彼女を安心させるように微笑んだのは、白雪の髪に黄金色の瞳、狐の耳をした女だった。それぞれ詠のフォニア、妖のクズノハの当主である。

フォニアの言葉を皮切りに皆、己の意見を口にし始めた。神王の招待を受けるか否かは元老院の中でも意見が分かれているようだ。

慎重を期すのは、フェリエール、ヨルハ、フォニアで、それ以外は概ねフェリシアの判断を尊重していた。

代々優秀な宰相を輩出しているファリエール、国の影である隠密を率いるヨルハが慎重なのは頷ける。

フォニアはそもそも、フェリシアが神王の招待を受けることに反対なのだろう。

「わたくしは陛下の判断に従うのがよろしいかと」

ゆつくりと、それでいてよく通る心地良い声で言ったのは、まだ若い女性だった。淡い緑の瞳に緩く波打つ薄紅色の髪は足元まで届く。

彼女が纏うのは襟ぐりが大きく開いた裾の長い黒のドレスで、小さな宝石がいくつも縫いつけられているのか、星屑を散りばめたように煌めいている。

しかし何より驚くべきことは、彼女の容姿がフェリシアと瓜二つであったこと。正確には成長したであろうフェリシアに、だが。

「アルテミシア殿……」

「陛下の母君がそう仰るのなら、我らが反対するのも、おかしい話なのだろう」

フロスティブルーの髪をした壮年の男性が呟き、くすんだ灰色の髪に鋭い刃を思わせる銀色の瞳をした男が低い声で笑う。

複雑な表情を浮かべている彼は智のファリエール家当主、マティアスⅡファリエール。笑みを零した男は竜族の長であり、鱗のウィーヴィル家当主、ジークヴァルトⅡウィーヴィルである。

そしてアルテミシアと呼ばれた女性は魔のレグラメント家の当主、アルテミシアⅡレグラメント。

可憐で、それでいて大人の色気を漂わせる彼女はフェリシアの実の母である。幼く体の弱い息子――フェリシアの弟に代わり、今も当主の座についていた。

「ジギスムント殿とシグレ殿は如何ですか？」

アルテミシアは先ほどから黙っている二人に声を掛ける。

暗い赤銅色の髪に、夕焼け雲を思わせる瞳をした二十代後半ほどの男は、狼の耳が頭の上に生えていた。人狼族の頂点に立つウールヴヘジン家。その当主シギスムント。

もう一人は恐らく二十代半ばほどに違いない。夜の闇を溶かしたような黒髪と黒曜石を砕いたように艶やかな瞳。僅かに尖った耳を持つ、鴉族。

影を司るヨルハの当主、シグレⅡヨルハ。料理長であり、『影』を率いるクロウの甥でもある。

「ジークヴァルド殿と同意見だ」

「……元より我らヨルハは影。懸念は尽きないが、陛下の判断に従う」

「マティアス殿とエルフリーデ殿も宜しいですね？ ……我ら元老

院は陛下の判断に従います」

マティアスと詠のフォニアのエルフリーデもアルテミシアの言葉に頷いた。フェリシアを陛下、と呼んではいるが、彼女が娘を見る瞳はとても優しい。

「では使者に正式な訪問の書状を。アリス、頼める？」

「お任せ下さい。それではこれにて閉会とします」

立ち上がったフェリシアは隣のアリスティドに視線を向ける。押しが弱く、いつもジュリアの影に隠れがちなアリスティドだが本来は優秀な補佐だ。書類作成はお手の物だし、彼ならば上手くやってくれるだろう。

使者は勿論、待たせてあるリュシアンとソール。

あからさまに嫌そうな顔をするジュリアをフェリシアとアリスティドがどうか説き伏せたのである。

当主たちは皆、フェリシアに一礼して出て行く中、アルテミシアだけがその場に残っていた。

「フェリシィ。無理はしていない？」

「……あたしは大丈夫。母様こそ無理はしないで」

フェリシアを案じるよう、彼女の手を取るアルテミシア。そんな母にフェリシアは、はにかむように笑って手を握り返した。

フェリシアら黒蝶族は高い魔力を持つ代わりに、体の弱い者が多い。

特に幼少時はそれが顕著で、幼くして命を落とす者も多かった。フェリシアの弟もそうだ。

本来ならレグラメント家を継ぐ者でありながらも体が弱いため、当主をつとめることが出来ない。

その代わりにアルテミシアが当主の座についているのである。けれど、彼女とて決して体が丈夫とは言えないのだから無理は禁物だ。

「わたくしなら心配いらないわ。あなたこそ、本当に無理はしないで。アリスがいてくれるとは言え、『魔王陛下』のお仕事は大変なのですから」

「母様……」

優しく微笑む母に、フェリシアはそれ以上何も言えない。アルテミシアが心配するのも無理はないのだろう。

人の王とは違い、魔王は世襲制ではない。神族の王と同じく、神託によって決定される。

魔力は歴代魔王の中でも随一とは言え、未だ魔族として未熟であるフェリシアを魔王にすることに、少なからず反対の声はあった。しかし魔竜王ラインハルトの神託は絶対。逆らうことは出来ない。それでも彼女が魔王であることに不満を持つ貴族は確かにいるのだ。流石に表立って非難するものはいないが、気にしてはいるだろう娘をアルテミシアは心配している。

「まあ、それより、リュシアンさんとはうまくいっているの？」

「は？」

にこにこ笑うアルテミシアの口から出た思いもよらぬ名にフェリシアが固まった。

そんなフェリシアに母は、うふふと笑っているだけ。

アリスティドは対照的な二人を交互に見つめて何故か慌てている。

「……誰が何と上手くいつてるの？」

「だからリュシアンさんとあなたよ」

何を当たり前のことを、と言うように可愛らしく小首を傾げるアルテミシア。

端から見ればとても愛らしい仕草なのだろうが、今のフェリシアにはまったくもってそうは見えない。

「うまくいつてるも何も魔族と神族よ。魔王が神族とうまくいつたら問題大有りじゃない」

期待に満ちた瞳で、こちらを見るアルテミシアから視線を逸らし、フェリシアは重いため息をついた。

うまくいくも何も、フェリシアとリュシアンは魔族と神族である。おまけにフェリシアは魔王。

神族なんぞと上手くいつていたら魔王失格だ。しかもアルテミシアだって彼が神王の使者だと知っているのに、何を考えているのだろう。

娘であるフェリシアにもまったく考えが読めない。

考えが読めない二人

「大丈夫よ、フェリシィ。愛の前に種族は関係ないの」

「ア、アルテミシア様……。それまででお願いします」

輝くばかりの笑顔で、とんでもないこと言われ、フェリシアもアルステイドも卒倒しそうになる。

こんな無邪気な女性がレグラメント家の当主だなんて、誰も気づかないだろう。とても二人の子供がいるようには見えない。

「ご機嫌いかがですか、アルテミシア殿」

「うげ」

突然聞こえたアルステイドではない男の声に、フェリシアはこれ以上なくらい不機嫌そうな顔になる。

光を弾く白金色の髪、神秘的な月色の瞳。非の付け所がない美貌はフェリシアには嫌味にしか見えない。

口は悪いが『顔』だけはいいのだ。例えば魔族であろうと、見入らずにはいられない。正に神竜王に愛された者。口さえ開かなければ完璧である。

もっとも、それが不可能であるのはフェリシアも知っているが。

「リュシアン様、貴方は一体どこから……。ジュリアに怒られますよ」

「それは申し訳ありません。当主の方々にご挨拶を、と思ったのですが、一足遅かったようですね」

神出鬼没。その言葉が何よりも似合う青年である。

怒り狂うジュリアを想像して青くなるアリスティドに謝ってはい
るが、フェリシアには分かる。確信犯だ。リュシアンが無断で部
屋を抜け出せば、ジュリアが怒るのは分かりきっているではないか。

「あらまあ、ご丁寧に。いつも娘がお世話になってます」

「いえいえ、こちらこそ」

「なっていない！」

深々と頭を下げ合うアルテミシアとリュシアン。

思わず声を荒らげるフェリシアだが、アルテミシアが気にした様
子はない。

何がお世話になっている、だ。相手は仮にも神族で、フェリシア
は魔王だというのに。

「ああ、もう……。書状はアリスに用意してもらってから、もう少し
待って」

「ええ。いくらでも待たせて頂きますよ」

これ以上は話にならない。そう悟ったフェリシアはさっさと話題
を変えた。

まともに相手にしてはこちらが疲れるだけだし、リュシアンがこ
こに来たのは、書状を催促する意味もあったのではないか。そう思
ったからだ。

しかしながら、彼の方が一枚どころか二、三枚は上手であるが。

「貴女のためならば」

さらりと言われた一言に、フェリシアは咄嗟に返事をする事が出来ない。予想とは違った切り返しだ。何よりアルテミシアがいるからか、いつもの調子が出なかった。

「あらあら、若いっていいわねえ」

「アルテミシア殿も十分お若いですよ」

フェリシアの気持ちを知ってか知らずか、ふわりと笑うアルテミシアと月色の瞳を細めて微笑むリュシアン。

性格は全く違う二人ではあるが、フェリシアからすればどちらも同じだ。考えと真意が読めない、という点では。

どうやらこの二人、気が合うらしい。魔族であるとか、神族であるとか、彼らには関係ないらしい。

近年、大きな戦は起こっていないとは言え、魔族と神族は本来なら相容れない存在だ。魔族と神族を作り出した魔竜王と神竜王が争っていたこともある。

「本当にリュシアンさんは上手いわね。奥さんにももらおうかしら？」

「貴女のような可憐な方にそう言って頂けて光栄です」

そう言いつつも、リュシアンも満更でもないらしい。

アルテミシアの夫であり、フェリシアの父はフェリシアが幼い頃に他界している。母が変わらず父を愛していることは知っていた。

しかし、フェリシアが夫婦となったリュシアンと母を想像してみると、卒倒どころの話ではなかった。

「お二人とも！ 冗談はそれくらいにしてください！ 陛下が……」

「ふふふふ……。母様とリュシアンが……夫婦」

慌てるアリスティドの視線の先では、フェリシアが乾いた笑みを浮かべている。

彼女の孔雀色の瞳は何も映していない。そんなフェリシアを見たリュシアンは、憂いを帯びた表情で謝った。

「すみません、冗談が過ぎました。私はフェリシア一筋ですよ」

リュシアンはフェリシアの手を自らの両手で包み込む。

そして、それを目の前まで持つてくると、彼女の指に口付けた。

降ってきた羽のような口付けに、フェリシアは呆然としている。

アルテミシアはあらあら、と嬉しそうに笑っていた。

アリスティドはと言うと、必死に辺りを見回しているではないか。

ジュリアがいなか確かめているのだろう。

「だ、誰があたし一筋よ！ 恥ずかしいことしないで！」

「私はいつだって貴女を想っていますよ」

顔を真っ赤にしても、説得力など皆無だ。

直ぐ様リュシアンから離れたフェリシアは、魔力を編み上げる。

しかし魔術が発動することはなかった。膨れ上がった魔力をリュシアンが苦もなく抑えていたからだ。

アリスティドはその様を見て、ただ驚愕するしかなかった。

優雅に微笑む彼は全く疲れていない。本気ではないと言え、歴代魔王の中でも随一の魔力と謳われるフェリシアの魔力を抑えている。

……単純な力をもって。

「リュシアン様、貴方は一体……」

「私は私に過ぎませんよ、アリスティド殿」

アリスティドの琥珀の瞳が微かに不安と驚きに揺れている。

だが呆然と尋ねるアリスティドにも、リュシアンは僅かに笑って答えただけだった。

「やっと見つけました……！」

身も凍るような笑顔と共に現れたのは他でもないジュリアだった。見入らずにはいられないほど凄絶な笑みだが、彼女のライトグリーンの瞳はまったくもって笑っていない。

ジュリアの視線はただ一人、リュシアンに向けられている。

「フェリシア、リュシアン！」

「ね？ だから言ったでしょ、ジュリア」

そんな彼女の後ろから顔を出したのはディオネとフレディ。

ディオネの紫の瞳を煌めかせ、フレディは得意げに胸を張っていた。

「御機嫌よう、ジュリア。今日も大変そうね」

「お見苦しいところを……。失礼しました。……その神族。貴方を見つけれられたのも、ディオネとフレディのお陰です。貴方ときたら力も気配も消しているんですからね」

ジュリアが纏う絶対零度の雰囲気をもとせずに微笑むアルテムシア。

そんな彼女にジュリアの雰囲気も和らぐが、それも一瞬。すぐに射殺さんばかりの視線をリュシアンに向けた。

どうやら今日は部屋を抜け出す際、リュシアンは完璧に力も気配も消していたのだろう。ジュリアが探っても分からなかった。

そこでディオネとフレディの野生の勘の出番である。そして見事、彼を見つけたということらしい。

「えーっと、もしかして……」

「陛下の思う通りです。神族の匂いを探し当ててもらったのです」

「なるほど。それは盲点でした」

勝ち誇ったように笑うジュリアに対し、リュシアンが悔しがっている様子はない。普段通り、穏やかな笑みを浮かべているだけだ。

おまけにはにかむディオネの頭を撫でているではないか。

「でも匂いって……」

「お二人の嗅覚は優れていますから。ですが、ジュリア。これはいくらなんでもやり過ぎです。リュシアン様は正式な神王陛下の使者なのですよ」

フェリシアは何とも複雑な表情をするしかない。

アリスティドは真っ青になりながらも、ジュリアに苦言を呈する。表立って彼女を注意出来るのは、彼とフェリシア、そしてクロウくらいだろう。

リュシアンがただの神族ならまだしも、今の彼は正式な神王の使者である。リュシアンや神王の考えが読めない以上、下手なことは出来ない。

もつとも、アリスティドが言わずともジュリアなら理解しているはずだ。

「ええ、そうね。でもそれとこれとは別。フェリシア様に手を出す輩は許しません」

「手は出していませんよ。今はまだ、ね……」

含みのあるリュシアンの笑みに、ジュリアが激怒したのは言うまでもない。

ちなみに二人の喧嘩に参加したがったディオネとフレディは勿論、フェリシアとアリスティドに止められたのだった。

リュシアンを考え

リュシアンとソールのために用意された一室は、魔王城の中でも滅多に使われることのない貴賓室である。

水晶で作られたシャンデリアに、金糸の刺繍が施された真紅の絨毯。あつらえられた調度品は全てアンティークだ。

金の縁取りが施されたテーブルは艶を放っている。座り心地の良いソファーに腰掛けたソールは、緊張のあまりティーカップを持っていたまま固まっていた。

「あのー……。もしもし？」

鋭い視線でソールを見下ろしているのは、銀色の髪を三つ編みにし、肩に流した人狼の青年。灰色掛かった青の瞳はまるで氷のよう。実際、彼にしてみれば神族のソールなど、セエレ以上に嫌われているのだろう。

「……なんだ？」

「……どうして俺がこんな目にあってるんです、かね？」

見上げる勇氣はないので、並々と注がれた（自分で注いだともいう）紅茶を凝視するしかない。

普段は敬語など全く使わないソールである。使おうとも思わないが、ローウェルを前にした時だけ意識しないと何故か敬語になるのだ。

「文句は勝手に抜け出した『あれ』に言え」

ローウェルは腕組みをし、両目を閉じている。

絶対零度の雰囲気を漂わせる彼に、ソールは本日何度目になるかわからないため息をついた。

ローウェルの言う彼、とは勿論リュシアンだ。

ソールも一応止めたのだが、元より話など聞かないリュシアンである。ジュリアがいらないのいいことに、さっさと部屋を出ていったのだった。

「あのね、団長サン。監視なんかしなくても俺、勝手に出て行ったりしないよ」

勇気を振り絞って顔を上げ、どうにか笑顔を作ってみせる。

だがローウェルには効果がなかったらしい。

彼の青の瞳に映るのは引きつった笑顔を浮かべる自分。ローウェルからすれば『ソール』はさぞ間抜けに見えるのだろう。

しかしそんなソールの思いとは裏腹に、彼はほんの少しだけ笑っている。

「……お前を疑っている訳ではない。こうでもしないと、陛下至上主義な誰かの気が済まないだけだ」

「そりゃ、ご苦労様なことで」

ローウェルの表情が緩んだのは一瞬。すぐまた氷刃のように研ぎ澄まされた美貌に戻り、ソールは思わず口を閉ざした。

彼の周りだけ氷雪の嵐が吹き荒れているよう。苦手なものになさそうなソールも、この青年とジュリアだけは苦手なのだ。

ローウェルは先程同様、腕組みをしたまま目をとじている。

しかしながら、居心地が悪いことこの上ない。ソールは内心半泣きになりながら、出て行ったきり帰って来ない青年に助けを求めた

のだった。

『早く、早く帰って来てくれよ、シアン！』

リュシアンは魔王城の屋根の先に立ち、城下を眺めていた。

魔王のお膝元であるこの街は、リュシアンの目から見ても活気に溢れている。

威勢の良い声が聞こえて来そうだ。民というのは現金なもので、普通の生活が出来るなら、暴君ではない限り、王が誰であろうと構わない。

だが第二十四代魔王であるフェリシアは民たちからも慕われていた。

彼女が愛らしい容姿であることは勿論、歴代の王と比べて民たちのことを心から思っているからだろう。

ジュリアやアリスティドの反対を押し切って、よくディオネやフレディと城下に遊びに出ているらしい。実にフェリシアらしいと思う。

くすり、と笑みを漏らしたリュシアンは前を向いたまま、背後に
いるであろう人物に話しかける。

「私にご用ですか？」

「……何を考えているのです？」

現れたのは黒のエプロンドレスを纏った女性だった。

緩やかに波打つ金の髪、薄緑の瞳は怒りに満ちている。フェリシア至上主義者にして魔王城のメイド長、ジュリアだ。

リュシアンを睨みつける彼女は酷く不機嫌そうである。

しかし今のジュリアは普段の彼女と比べてあまりに静かすぎた。彼女はフェリシアが絡むと、良くも悪くも平静ではいられない。

「何を、と言いますと？」

「とぼけても無駄です。この際、貴方が何者であろうと構いません。神王の使者であろうと何だろうと。ですがフェリシア様を悲しませることだけは許しません。フェリシア様はほんの僅かとは言え、貴方に心を許しているのですから」

リュシアンが首を傾げると、ジュリアは少し苛立ったように言葉を紡ぐ。今は少しばかり冷静らしい。

何だろうと構わない。そう口にした瞬間、僅かにリュシアンの月色の瞳が見開かれた。それも一瞬で、彼の変化にジュリアは気づかない。

「とぼけてなどいませんよ。それにしても一体、どういう風の吹き回しですか。しかし仮にも使者の前で陛下を敬称もつけずに呼ぶとは……。貴女も中々に怖い御人だ」

リュシアンは顎に手を当てて困ったように微笑する。それは彼女

が僅かばかりとは言え、リュシアンを認めているということ。誰よりもフェリシアを大切に思う彼女が。

リュシアンにすれば驚くべきことだ。

ただ、仮にも使者の前で神族の王に敬称も付けないとは、何を考えているのだろう。リュシアンが報告しないとも思っているのか、あるいは気にもしていないのか。

「何を言っているのです。まったく……白々しい。神王がどうだと言うのです。私の主はフェリシア様だけ。貴方や神王にどう思われようと構いません」

そう言っただけのけるジュリアには恐れるものがないのだろうか。あるいはそれが魔族の矜持なのか。ジュリアが頭を垂れるのはただ一人。愛らしい魔王フェリシアだけ。

それまで笑みを浮かべていたリュシアンが、一転して真剣な表情になる。

「陛下の機嫌を損ねることになろうとも、ですか？」

「それならその程度の器だったということです」

リュシアンの問いにべもなく答えるジュリア。

たかが敬称程度で機嫌を損ねるようなら器が知れる。そんな王に敬意を払う必要はないと言いたいのだろうか。

するとどうだろう。しばしの沈黙の後、神族の青年は声を上げて笑ったのだ。

普段の彼は笑みを浮かべることはあっても、笑い声を漏らすことはない。それなのに、目の前の青年は本当におかしげに笑っていた。ジュリアも一瞬驚いたものの、直ぐに訝しげな顔になる。

「私を馬鹿にしているのですね」

「まさか。貴女の答えが面白くてつい……」

馬鹿にしているのか、と半眼で睨むジュリアに、まさかと首を振るリュシアン。

彼女を馬鹿にしている訳ではない。ただ、ジュリアの答えが予想外だったので、思わず笑ってしまったただけだ。

ジュリアは馬鹿にされていると感じたのだろう。未だに不機嫌そうな顔をしている。

「そんなに睨まずとも、馬鹿にしている訳ではありません。貴女言う通りですよ。その程度で機嫌を損ねるようなら王として器が知れます」

「……一体どちらの味方なのです」

ジュリアにもリュシアンの考えが読めない。一年ほど前からふらりと魔王城に現れ始めた神族で、フェリシアを気に入っている。

顔はいいが口は悪い。相当な手練の上に、神竜王の加護を受けている。ジュリアが彼について知っていることなどその程度だ。

そして何故、リュシアンはこれほどまでに余裕があるのか。何に対しても動じず、彼が驚いたところなど見たことがない。

リュシアンはそんなジュリアの考えを読んだように薄く笑う。

「味方も何もありませんよ。ただ事実を述べただけです。……それと一つだけ。彼女を悲しませるのは私とて本意ではありません」

「何を……」

ジュリアが尋ねる前に、リュシアンは忽然と消えていた。飛び降りた訳でもなく、幻であったはずもない。彼は確かに“リュシアン”だった。

転移の術でも使ったのだろうか。もしかしたら、初めから自分を待っていたのかもしれない。

ジュリアは呆れたように嘆息すると、身を翻してぽつりと呟いた。

「嫌な奴……」

フェリシアの望み

正式な書状を書くと言っても直ぐに出来る訳ではない。書状を書いたり、魔王がサインをする時に使われるペンやインクも普通のものではないのだ。

特殊な術が施されたもので、偽造できないようになっている。光に透かせば文字が金色に光輝くのだった。

アリスティド専用の執務室は彼の性格同様、きちんと整頓されている。広々とした机の上には、彼の承認を待つ書類や民の意見書など様々なものが積まれていた。

それらの書類は全てアリスティド自身が見分してから、必要な分がフェリシアの元へと届けられる。

羽ペンを置き、椅子に深く背中を預けたその時だ。

目の前にティーカップが差し出された。白い陶器で出来たティーカップとソーサーはアリスティドのお気に入りなもの。

スノーフレークが描かれたそれは『彼女』が選んでくれたものだ。

「少し休憩にしたら？」

「……ありがとうございます。」

ティーカップを受け取って微笑み返す。アリスティドを見下ろしているのは勿論、幼なじみでありメイド長をつとめるジュリア。

ティーカップから湯気が立ち上り、良い香りがする。

彼女がいてくれた紅茶は絶品だ。アリスティドの好みを知っているため、中身は言うまでもなくミルクティーだった。茶葉もミルクと相性がいいアッサムだろう。

お茶請けとしてシフォンケーキにホイップクリームが添えられて

いる。

アリスティドはティーカップを指の腹で撫で、ジュリアを見上げた。アリスティド以外が見れば普段と変わらない彼女だ。

だがこれでも二人は幼なじみ。彼女の異変を見逃すほどアリスティドは鈍感ではない。

「そんな顔をしてどうしたんです？　またリュシアン様が何か仰ったのですか？」

「……やっぱりアリスはお見通しね」

アリスティドが尋ねると、ジュリアは敵わないという風に笑った。いつも強気な彼女であるが、唯一アリスティドの前では弱音を吐く。それは彼女がジュリアにとって気心が知れた相手であるからだろう。

「……私はただ、フェリシア様を悲しませたくないだけ。ねえ、アリス。私の考え、間違っているかしら？」

「いいえ。ジュリアが陛下を大事に思っていることは知っていますよ。ですが、陛下はもう小さな子供ではないのです。もしそれが陛下がお望みになったことだとしても、貴女は同じことが言えますか？」

アリスティドはふわりと微笑み、そして憂いを帯びた顔でジュリアに問うた。

もしそれがフェリシアの望みだとしても、彼女は今と同じことが言えるだろうか。

フェリシアを大事に思っているのはジュリアだけではない。アリ

ステイドやクロウ、ローウエル、エヴァンジェリンにリーフとリースの双子、ディオネやフレディだってそうだ。一応は魔王城の住人であるセエレも。

「……フェリシア様の望まれたことならば、私は何も言わないわ。だけど、あの神族だけは別」

「私は別にリュシアン様とは言っていないませんが……」

銀のトレイを手にしたジュリアは、それを握り潰さんばかりの勢いで抱えている。そんな彼女をアリスティドは苦笑しながら見つめていた。

フェリシアへの思いが強すぎて暴走してしまうのは彼女の悪い癖だが、それは彼女を大切に思っていることに他ならない。

それにアリスティドは何もリュシアンについて言った訳ではなかった。あくまでも例えだ。

「気にしないで。独り言だから。それよりも休憩にしましょう。アリスは放っておくと本当に休まないのだから」

「……それは耳が痛いです」

ふふふ、と笑みを漏らすジュリアからアリスティドは視線を逸らす。

彼女の言う通り、一度仕事に没頭してしまえば他は何も目に入らない。時間を忘れて仕事をしているのがアリスティドの常である。ジュリアが気にかけていなければ食事はしないし、睡眠は取らないで大変なのだ。

ただ身綺麗にしているし、どんなに仕事をしても部屋が汚れることはないのだが。

やるべき仕事はどんなにやっても一向に無くなることはない。

それはそうだ。この国には多くの魔族たちが住んでいるのだし、彼らが起こすトラブルも一つや二つではない。

大抵は部下たちやローウェルたちが片付けてくれるのだが、手に負えない時はアリスティドに処理が回ってくることもある。

「……どう？」

「美味しい、ですよ。私も久しぶりにジュリアと料理をしたくなってきました」

ふわふわのシフォンケーキにクリームをつけて口に運ぶ。

甘すぎないケーキと程よい甘さのクリームはとても美味しい。甘さのバランスがちゃんと取れているから、しつこいと感じないのだ。アリスティドは炊事や洗濯、掃除に裁縫などひと通りのことは熟せる。その中でも特に料理が好きで、昔はよくジュリアと一緒に作っていたものだ。

「今度フェリシア様にとって差し上げましょう。きっと喜んで下さるわ」

「……ええ、そうですね」

ここ最近は政務に負われて趣味に割く時間がなかったが、久々にジュリアと料理をするのもいいだろう。

昔を思い出しながらアリスティドはフォークを置き、そっと微笑んだ。

王として

大粒の水晶で作られたシャンデリア、敷かれた絨毯は金糸によって薔薇の刺繍が施されている。まるで血のように赤いそれは、この屋敷に住む“彼女”の趣味だ。テーブルやソファーを始めとした家具や調度品は全てアンティーク。

一際大きな木製の柱時計は、室内に置かれたどんな物よりも古い。白い文字盤に黄金の短針が静かに時を刻んでいた。

臙脂色のソファーに腰掛けるのは一人の男性だ。年の頃は二十代半ばほどだろう。肩より僅かに長い髪は莖を思わせる薄紫で、魔性を宿した瞳は最高級のルビー、ピジョン・ブラッドを思わせる。

女性のように整った、優しげな美貌をしているが、彼には隠し切れない色香がある。白い肌は白磁のようで染みすら見当たらなかった。

彼は黒のスラックスを履き、レースで縁取られた白いシャツを纏っている。胸もとで結ばれているのは赤のリボンタイだ。

羽織った外套は夜の闇のようで、金糸、銀糸の刺繍は夜空に輝く星々のよう。

「おかえり。レックスはよくやっているようだね」

彼は入ってきた人物を見るなり、蕩けるような笑みを浮かべた。手を差し伸べると、その人物は彼の手をとって微笑む。

こちらは十代半ばほどの少女である。愛らしいアンティークドールそのもので、緩やかに波打つ髪はルビーレッド。

長い睫毛に縁取られた瞳は咲き誇る薔薇色をしていた。

「うむ。ただいま戻った、ライ」

「そう、良かった」

少女――エヴァンジェリンを迎えた彼こそ、現当主レックスの父であり、彼女の夫であるライオネルⅡアルカードである。

ライオネルは貴族であるが、婿養子でアルカード家の血を引いてはいない。見た目こそエヴァンジェリンの方が下ではあるが、実際は彼女より年下だ。

「こっちへおいで、エヴァ」

ライオネルは座ったまま、そつとエヴァンジェリンを抱きしめる。髪を撫でられた彼女は心地よさそうに目を細めた。

ここに息子がいれば呆れるところだが、彼はまだ魔王城である。
よって夫婦の時間を邪魔する者は誰もいない。

一見すると十代半ばの少女と二十代半ばの青年であるため、見様によつては危ない？ 光景だ。

しかし本人達は大真面目だし、実際はエヴァンジェリンの方が年上である。

「どうかした？ そんな浮かない顔をして」

暫くは心地よさげに目を細めていたエヴァンジェリンだが、彼女の様子が普段とは違うことにライオネルは気付いた。生命力溢れる薔薇色の瞳が不安げに揺れている。

今日は城で七大貴族の当主たちが集まっていたはず。だからこそアルカード家の当主であるレックスは不在なのだが。

一足先に城から帰って来た彼女は少し沈んでいた。

「それが……以前話したりユシアンについて覚えておるか、ライ？」

「覚えているよ。陛下をいたく気に入っている神族の彼だね。でもそれが？」

“リュシアン”は一年ほど前から、フェリシアの前に現れ始めた神族の青年である。ライオネルもエヴァンジェリンからかなり曲者だと聞いたことがあった。

しかしその彼が彼女の憂いと何の関係があるのだろうか。

「あれは神王の使者だった。神王はフェリシアをパレスに招きたいという旨の書状をあやつに託したのじゃ」

「神王陛下の……！」

神王。神竜王グランミュリンの神子にして、神族の王。その性別も名すらも魔族たちは知らない。全てが謎に包まれている。

一年前からフェリシアの前に現れ始めたリュシアンと今回の書状。エヴァンジェリンでなくても勘ぐらずにはいられない。

つまり彼女はこう言いたいのだろう。彼がフェリシアの元を訪れていたのは神王の命ではないかと。

エヴァンジェリンがフェリシアを娘のように思っているのはライオネルも知っていた。フェリシアはきっと傷つくだろう。表面上は平然としていても。

「わらはフェリシアに傷ついて欲しくないのじゃ。ああは言っても、リュシアンのことを気に入っているに違いない。例え神王の命でなかったとしても、一度沸いた疑念は消えぬ。今までのように接するのは無理があるう」

「エヴァ……」

ライオネルは優しくエヴァンジェリンの髪を梳いた。

エヴァンジェリンⅡアルカード。アルカード家の前当主であり、『鮮血を纏いし夜の女王』の名で呼ばれる大吸血鬼。

彼女が弱みを見せるのは夫であるライオネルの前でだけ。普段はその名に相応しい振る舞いをしているが、エヴァンジェリンも女性である。

例えリユシアンが本当にフェリシアを気に入っていて、自分の意思で彼女の元を訪れていたとしても、一度沸いた疑念は消えない。今までのように軽口を言い合うことは出来ないだろう。

「だけど、陛下の答えは出ているんだよね？」

「ああ。フェリシアは神王の招待を受ける」

未だ魔王として未熟であれど、フェリシアは王の役目を理解している。どんな茨の道だとしても彼女は進むだろう。

どんなに己が傷つき、血を流そうとも魔族のため、魔王として。

「エヴァも行くつもりだね？」

「退いたとは言え、それでもアルカード家前当主じゃからの。わらわたち七大貴族は魔王を、フェリシアを補佐するために存在する」

問いではあったが、ライオネルもエヴァンジェリンの答えを予想していたのだろう。確認に近い夫の問いに、エヴァンジェリンも頷く。

当主の座を息子であるレックスに譲った今も、アルカード家の者であることには変わらない。

勿論、エヴァンジェリン自身がフェリシアの力になりたい、という理由が一番だが。

七大貴族はこの国をおこした魔族たちの末裔。彼女らは魔王を補佐するために存在している。

「うん。君のそんな所がわたしは好きだよ。わたしは待つことしか出来ないけれど」

「……ライが待っていてくれるから、わらわはここに帰って来れる。『鮮血を纏いし夜の女王』ではなく、エヴァンジェリンとして」

エヴァンジェリンはそっと自分の髪を撫でる手を取り、目を閉じて口づけた。

ライオネルが待っていてくれるから、帰る場所があるから強くあれる。彼と出会ったことでエヴァンジェリンは愛を知ったのだ。

「ならわたしも待つよ。君が帰る場所はわたしの元だから」

ライオネルもそんな彼女の髪や頬に口づける。もしこの場にレックスがいたのなら、そろそろ辟易していたことだろう。

一体何歳までいちゃいちゃするつもりだ、と。

勿論、言って聞くような相手ではないことは、息子が一番良く分かっているだろうが。

「ライ……」

「いいよ。おいで……」

エヴァンジェリンの薔薇色の瞳が蠱惑的に煌めく。

ライオネルの真紅の瞳とはまた違うが、その瞳は彼を魅力して止

まない。宝石のような、いや、宝石より美しい瞳に魅入られた。

ライオネルはそっとボタンを外し、首元を寛げる。露になったのは白く、滑らかな肌。きめ細かい肌はまるで女性のように。

エヴァンジェリンは答える代わりに妖艶に微笑むと、そっとその首筋に牙を立てた。

一人じゃない

アリスティドを待っている間、フェリシアは執務室に戻って溜まった書類を捌いていた。簡単に目を通して判子を押すだけのものから、民からの要望書など一度会議にかけなければならぬものまで数えればきりが無い。

そんな彼女の後ろには眠そうなクロウが控えている。ちなみにこれはジュリアが考えたもので、リュシアンホイホイと言うらしい。もし忌々しい神族の青年がフェリシアの邪魔をするようなら、クロウが実力で排除する仕組みになっていた。

眠そうに瞬きしている少年は、とても荒事に向かないように見える。ローウェルやフレディのように帯剣もしておらず、武器という武器も持たない。

ただ彼はこう見えて隠密を束ねる長であり、幽のヨルハ一族に連なる者。暗器使いであるクロウは、ありとあらゆる場所に武器を隠し持っているのだ。

いざとなれば、顔色一つ変えず邪魔者を排除するだろう。

「あ、ハエ……」

瞬間、クロウが動く。今まで眠そうにしていたとは思えない凄まじい速さだ。ただ相変わらず藍色の瞳は半ばまでしか開いていないが。

だがフェリシアにすれば問題はそこではない。

「……クロ」

羽根ペンを持つフェリシアの手が震える。振り向いた彼女の笑顔

はひきつつていた。何故なら、執務用の机に深々と苦無が突き刺さっているからだ。

幸い書類は無事だが、勘弁して欲しい。ちなみにハエは勿論、ご愁傷様である。

「フェリシアの邪魔、した……」

「いや、危ないからね！　もっと穏便に。クロが作った殺虫剤で……！」

全く悪びれる様子はないが、ハエなど邪魔の内にも入らない。その度に武器が飛んで来ると思えばとても集中出来ないではないか。クロウなら間違っても自分を傷つけることはないだろうが、心臓に悪すぎる。

苦無を投擲するより、殺虫剤という素敵アイテムがあるのだから。ジュリアがフェリシアのためだけに編み出した（製作はクロウだが）、どんな虫でもイチコロ君。古今東西ありとあらゆる毒が詰め込まれた、ということではない、残念ながら。

「あれ……使う前に……術使わないと、死ぬ」

「ちよっ、ええ！？　そんな危ない代物だったの！？　効果を追求し過ぎだって！」

大真面目に、しかもさらりと言ったのけるクロウ。

フェリシアは思わず机を叩いて立ち上がった。今まで一度も使ったことはなかったが、何かの拍子で使いでもしたら、本当に洒落にならない。

あらゆる毒に耐性のあるクロウとは違い、こちらは間違いなくイチコロではないか。

「追求……大事」

「大事だけど、ものには限度ってものが……はあ」

何故か胸を張って言うクロウに、フェリシアはため息しか出てこない。殺虫剤の効果を高めるのは悪いことではないだろう。

しかしものには限度というものがある。これでは殺虫剤ではなく、殺人剤ではないか。実に笑えない。

「とりあえずこれ、抜いてくれる？」

目の前に突き刺さった苦無は、どうやってもフェリシアの視界に入る。このままではとても書類を捌く気にはなれないし、何より居心地が悪い。非常に悪い。

無言で頷いたクロウは、深々と突き刺さった刃を苦もなく引き抜き、袖に仕舞った。当然のことながら、執務用の机にはしっかり跡がついている。

普通なら流石のフェリシアも怒るところなのだが、相手はクロウ。彼に悪気がないことは分かっていた。

気を取りなおして羽ペンを持ち、書類に目をやる。

けれど、とても手をつける気にはなれなかった。リュシアンのこととが頭から離れない。書類を捌いている間も。考えないようにしても無駄だった。

何故、どうして。答えは出ない。

信じるつもりなんてなかったのに。いつの間にかフェリシアの中でリュシアンという存在が大きくなっていった。

信じれば裏切られる。分かっていた、理解していたつもりだった。彼の言葉は全て嘘。そう思えるのならどんなに楽か。

フェリシアはそっと引き出しを開け、中にあつた髪飾りに触れる。自分の瞳と同じ孔雀色の石がはめ込まれた髪飾り。銀で作られたそれは、今にも羽根を広げて飛び立つように見えた。

リュシアンからの贈り物。認めたくはなかったが、嬉しかった。

「ねえ、クロ。リュシアンは……」

口を開きかけて止める。今は何を言っても意味が無い。それにクロウに言った所で彼が困るだけだろう。

沈黙するフェリシアの頭をそっと撫でたのはクロウだった。弾けるように顔を上げ、クロウを見つめる。

「大丈夫……。フェリシア、ひとり……じゃない」

「クロ……」

クロウの表情は普段と変わらない。いつもと同じように眠そうに瞬きをしている。

昔、頭を撫でてくれた母の手を思い出した。あたたかくて優しい手。

「ありがとう。うん。一人じゃない、か」

ありがとう。礼を言いながらフェリシアは胸が熱くなるのを感じた。一人じゃない。その言葉が何よりも嬉しかった。

いつまでも悩んでいる訳にはいかない。フェリシアもそれは重々承知していた。なるべくリュシアンについて考えず、無心で書類を捌いていく。

こんな時に限ってセエレもディオネもフレディですらやって来ない。いつもは嫌だと言っても乱入してくるというのに。ジュリアに

釘を刺されたのだろうか。

室内にはフェリシアが羽ペンを走らせる音だけが響いている。クロウは影のように佇み、微動だにしない。瞬きをしているため、起きてはいるのだろうか……。

「フェリシア」

自らの名を呼ぶ声に反射的に声を上げる。するとそこには今一番会いたくない相手がいた。

煌く白色の髪、仄かな光を放つ月色の瞳。何もかもが光を宿している。こんな時でさえ綺麗だと思うのは、きつとおかしいのだろうか。

フェリシアが言葉を発する前に、いつの間移動したのかクロウが苦無をリュシアン首元に突きつけていた。

それでも彼は驚くどころか微笑を浮かべているではないか。クロウはいつもと変わらぬ無表情で、何を考えているのかいまよく分からない。

ただジュリアの言いつけをちゃんと守っているのだろうか。

クロウ自身はリュシアンを嫌ってはいないだろうし、むしろ彼の中では気に入っているに違いない。

「クロウさん。私は少しだけ彼女と話がしたいだけです。これで手を打っては頂けませんか？ アルフェミア。神族の土地でしか咲かない花から特別に生成した毒です」

どこか胡散臭い笑みを浮かべて、リュシアンが取り出したのは、手のひらより小さな硝子の小瓶。中には董色の液体が揺れている。彼の言葉によると、董色の液体は毒だとか。神族の土地でしか咲かない花らしく、フェリシアも聞いたことがない。

けれど毒マニアであるクロウには本物と偽物の違いも分かるだろ

う。フェリシアがそつと覗き込んでみると、少年の藍色の瞳は珍しく煌めいていた。

親しい者でなければ分からないほど些細な変化だが、どうやら本物の毒らしい。おまけにクロウがここまで感情を露にするほど手に入れた毒、だ。

「賄賂ー！」

「賄賂などんでもない。これは私の好意、言うなれば心づけですよ」

フェリシアが指をさして叫んでも、リュシアンはくすくすと笑うだけ。彼が目の前で小瓶を揺らせば、クロウは直ぐ様それを掴み、袖の中に放り込んだ。

そして自分は部屋の隅に立って目を閉じる。知らん振りをしていくからさっさと済ませ、だろうか。

「そして懐柔されるのはやっ！」

いくら何でも早すぎる。一瞬ではないか。アルフェミアなる花の毒がどれほど貴重か知らないが、尋常ではない変わり身の早さだ。クロウはと言えはかなりご満悦らしい。

すれ違う思い

フェリシアからリュシアンに話すことなど何もない。何を言えればいいかなんて分からないし、口を開けば、彼を責めてしまいたいそうだった。

責めるも何も、彼は自分がすべきことをしただけだろう。リュシアンは神王の使者なのだから。

何も言わないフェリシアを見て、リュシアンは笑う。その笑みが少しだけ悲しげに見えたのはきつと、気のせいだ。

「信じて欲しい、とは言いません。私が貴女に嘘をついていたのは事実です。そして今も……」

リュシアンは謝罪も言い訳もしなかった。それ故にフェリシアの心は痛む。すみません、と謝ってくれたなら、まだ良かった。あるいは言い訳をしてくれたら。

だが彼は一切、言い訳も謝罪もしなかった。はぐらかす訳でもない。はっきりと嘘をついていたと。

ほらみたことか、心の中でもう一人のフェリシアがせせら笑う。

結局、彼は何も自分に本当のことを教えなかった。

俯き、拳を震わせるフェリシア。どうしてこんなにも痛いのだろう。

分からない、分かりたくもない。無言を貫くフェリシアに、リュシアンは言葉を続ける。

「私はただ、貴女に私たちの国を見て欲しかった。魔族と神族、住む民こそ違えど、この国も我が国も“同じ”です。神族だわたしたちって。善い者も悪い者もいます。……一方的に理解して貰おうなんて、都合が良すぎますね。それでは私はこれで。クロウさん、ありがとうご

「ございました」

扉が閉まる音がするまで、フェリシアは指一本動かさなかった。リユシアンは気配が遠ざかるのを確認して、息を吐く。

リユシアンはただ、自分たちの国をフェリシアに見て欲しかったという。

フェリシアは神族の土地に行ったこともなければ、目にしたこともない。知識として頭の中にあるが、百聞は一見にしかず、という言葉もあるほどだ。

リユシアンはこんなことを言うために、わざわざ自分を訪ねたのだろうか。

クロウが心配そうにフェリシアを見下ろしているが、それどころではなかった。様々な想いが浮かんでは消える。

「……どうして、言い訳の一つもしないの。いつもなら笑って誤魔化すのに……！ こんな時だけ、何も言わない……」

「いっそ全て嘘だったと言ってくれば、どれほど楽だったか。そうすれば罵ることが出来たのに。」

痛くて痛くて堪らない。自分は魔王なのだ。

だから常に強くあらなければならない。弱みを見せてはならない。なのに、心はいつまで経っても乱れたままだった。

人狼族の青年の気配が遠ざかるのを確認して、ソールは深いため

息をついた。

熱かったはずの紅茶はいつの間にか冷めており、その事からもソールの緊張ぶりが窺い知れる。針のむしろ状態で頑張った自分を褒め称えたいくらいだ。

捨てるのも勿体無いため、（ソールはこう見えて律義である）すっかり冷えきった液体を飲み干し、用意されていた焼き菓子に口に放り込んだ。

すっきりとした甘さが口内に広がる。香ばしく、さくさくした食感。流石というところか。

魔王城の貴賓室はパレスと比べ、全体的に華やかで豪華である。そもそも神族は僉約家であり、贅沢をするという観念自体が少ない。神王の居城ということで、パレスはどちらかと言うと派手な宮殿ではあるが、魔王城には敵わないだろう。

扉が開く音にソールはカップをソーサーに乗せ、再び深い溜息をつく。

全ては彼が悪いのだ。半ばヤケ気味に足を組み、背後にいる人物を睨みつけた。

「おい、シアン。お前が帰って来ないから、えらい目に合わされただろうが……！ あの団長さん、ホントに怖いんだからな！」

「私のせいになしないで下さい。自業自得でしょう」

泣きそうになっているソールを冷たく一瞥し、リュシアンは彼の向かい側にあるソファアに腰掛ける。二人は神族であるが、一応客人であるため、貴賓室なのだろう。

普段は使われることのないこの部屋も、掃除は隅まで行き届いていた。その辺りは流石ジュリア。一切手抜きはない。

例えこの部屋に滞在するのが神族であっても、彼女は決して手を

抜かないだろう。

「それ、お前にだけは言われたくないんだけどな。……それはそうと、ホントに良かったのか？ 正直、姫さん見てられなかったぜ」

「……これでいいんです。どの道、彼女を騙していることに変わりはないんですから。『私』はフェリシアを傷つけてしまう。私は彼女に関わるべきではなかったのかもしれない」

自分たちが神王の使者だと告げた時、フェリシアは明らかに動揺していた。

全て彼が選んだこと。ソールもとやかく言うつもりはなかったが、彼女を見て、どうしても言わずにはいられなかったのだ。

良かったのか、と問うソールにリュシアンは笑う。

返って来た言葉は普段の彼からは想像出来ない程、弱々しいものだった。

何にしても自分が彼女を騙していることに変わりない。自分という存在がフェリシアを傷つけると。嘘を重ねた先に待つものとは何だろう。

そんなリュシアンにソールは掛ける言葉を見つけられずにいた。どんな言葉でさえ、彼の心を覆う暗雲を払うことなど出来ないと分かっていたから。

ローウエルは非常に不機嫌だった。

廊下を歩く彼は殺気を撒き散らしており、すれ違う全ての者たちが彼に道を譲る。その理由は言わずもがなリュシアン。

それはローウエル自身も理解していたが、何に腹が立っているかと言われれば、それはやはりフェリシアへの態度だ。

今までは一目置く、まではいいかないが多少なりとも認めている部分もあった。

それなのに彼は神王の使者だという。フェリシアに近付いたのもそれが理由か。ローウエルがいくら問い詰めても彼は何も言わないだろう。薄く笑っているだけで。

実に気に入らない。あのリュシアンという男。神族であることは勿論、フェリシアが気にかけているというところも。

フェリシアは妹のような存在だ。可愛くて仕方がない。ジュリアほどではないが、彼女には幸せになって欲しいと思う。

そんな不機嫌オーラを全身から漂わせるローウエルに近づく人物が一人。

『彼女』は眉間に皺を寄せている彼など気にせずに満面の笑みを浮かべ、ローウエルの前に立った。

「ロー、どうしたんだ？ みんなが怯えているぞ」

艶めく藤色の髪に、紫水晶よりも美しい瞳。整った容貌の若い女性で、ローウエルと同年代だろうか。ただ呆れたような表情や声音は、女性というより少女のよう。

現に彼女——ディオネは実験により生み出された存在で、外見と中身は必ずしも一致しない。

「そうか」

「そうか、じゃないだろう。あまり皆に心配を掛けては駄目だ。フエリシアが心配なのは分かるが、もう少しどうにかならないか？このままでは死人が出るぞ？」

素っ気ない答えを返すローウェルは、ディオネの顔すら見ていなかった。フエリシアが心配なのはよく分かる。

しかしこれではあまりに使用人や騎士たちが不憫でならない。毅然とした態度を取るディオネに、騎士たちが心の中で声援を送ったとか、送らないとか。

今のローウェルはまるで永久凍土のよう。彼が通った場所から凍りつくようだ。そんな意味での“死人”発言だろう。

「以後気をつける。……フレディ、今すぐ騎士たちを集めろ。訓練だ」

ディオネを一瞥したローウェルは、背後で固まっていたフレディに目を向けた。少年の硬直がとける。命令されたフレディは文句一つ言わず、弾かれたように駆け出した。

「相変わらず人が悪いな、ローは」

「俺は人ではなく魔族だ」

苦笑するディオネに対し、ローウェルは表情一つ変えず、歩き出したのだった。

どうあるべきか

魔族たちが慌ただしく走りまわる中、セエレは取り残されたような気がしていた。

フェリシアには到底近づけないし、アリスティドも同様だ。ジュリアは色んな意味で怖すぎるし、クロウは姿が見えない。

先ほど、一瞬だけフレディを捕まえて聞いた話だが、リュシアンはなんと神族の王の使者だという。おまけに神王は彼女を国に招くつもりだとか。

これにはセエレも驚きを隠せなかった。皆が忙しく動く中、城の中でセエレだけが手持ち無沙汰である。

そのため、愛犬エクスカリバーンと魔王城の屋根の上にいた。ここならば誰かの邪魔をすることはないし、気も遣わなくていい。

優しくてあたたかな太陽の光は心地よく、エクスカリバーンもゆるゆらと尻尾を揺らしている。

「……暇だな、エクス」

「わふっ」

一応、城に留まることを許されているものの、セエレは部外者だ。紫の瞳を持っていたても、魔族ですらない。

彼らとセエレは何もかもが違う。持ちうる力も寿命も。

似た姿をしていても全く違う存在である。普段はつい忘れてしまいうが、彼らには彼らの世界があるのだろう。

「でも、どうして……」

エクスカリバーンを撫でていたセエレの手が止まった。

何よりも驚いたのはリュシアンのこと。魔族と神族について詳しくなくとも、神王が使者を寄越したのは異例の事態だと分かる。

リュシアンは所謂恋敵で、セエレが案じる必要はない。心配なのはフェリシア。

彼女は少なからず神族の青年に心を許していた。ずっと見ていれはすぐに分かる。彼になら負けても仕方がない。そう思っていたのに。

「本当にリュシアン殿は何を考えているんだ。分かるか、エクス？」

「わう？」

「分かる訳ないな」

セエレは笑い、首を傾げるエクスカリバーンの頭を撫でる。彼に聞いても分かるはずがない。エクスカリバーンはそんな飼い主の事情など知らず、のんきに欠伸をしていた。

白い犬を膝に乗せていたセエレは、何者かの気配を感じて振り返る。

そこにいたのは藤色の髪をした女性だった。セエレと同じ紫の瞳はきらきらと輝いている。手持ち無沙汰なのは、何も自分だけではないらしい。

「セエレ、エクス、ここにいたのか。エクスと昼寝とは羨ましい。私も寝ていいか？」

「と言っても他にすることなかったしね。皆さん色々と忙しいようだし。まあ、ディオネもすることなさそうだし、いいんじゃない？」

女性――ディオネは満面の笑みを浮かべ、セエレの隣に腰を下ろ

した。見た目は若い女性とはいえ、彼女の中身は子供そのものである。言動も勿論それだ。

セエレもセエレで微妙な立場なのだが、ディオネもかなり特殊だった。

彼女は魔族ではなく、ましてや神族でもない。どちらでもあり、どちらでもないのだ。

禁忌の研究によって生み出されたディオネは魔族と神族の血より生まれた。かつて魔王城から追放された宮廷魔術士が先代の魔王を恨み、作り上げた存在、それこそが彼女なのである。

フェリシアにより解放されたディオネは彼女を慕い、そばにすることを望んだ。

魔王城の面々には好意的に受け入れられているが、ディオネの存在をよく思わない魔族だっている。もともと、ディオネはそれを気にするタイプではないのだが。

「そうなんだ。みんな忙しそうだし、ローもぴりぴりしてる。リュシアンが神王の使者だというのは、それほど大事なのか？」

「そりゃあ、リュシアン殿は神族で、フェリシア様をよく尋ねて来てたから。おまけに胡散臭いしね」

ディオネはセエレの上で寝そべるエクスカリバーンの頭を撫でながら尋ねる。ローウエルの機嫌が悪いのはいつものことだ。

セエレも魔族と神族の軋轢について詳しくないが、彼女の方はさっぱりに近い。

「リュシアンに聞かれたらばこぼにされるぞ」

「それは勘弁して欲しいよ。いくら僕が気術を得意としてるからっ

て、ディオネやあの人達と一緒にされたら」

彼女の言う通り、今の言葉をリュシアンが聞けば間違いなくぼこぼこにされるだろう。しかも見惚れるような神々しい微笑を浮かべて。

人族は魔術や神術を使えない代わりに、体内や周囲の気を操る気術を扱うことが出来る。

セエレがリュシアンやジュリアの攻撃を受けてもぴんぴんしているのは、気術で己を強化しているからだ。

とは言え、人族と魔族や神族では身体能力からして違う。いくらセエレが卓越した気術の使い手であっても、そればかりはどうしようもない。

「難しいことは苦手だ。……よし、セエレ。殴っていいか？」

「どこをどうしたらその結果に行き着くの？ 僕は殴っていいものじゃないよ。ちょ、ディオネ！ 待って、ストップ！」

「くうん……」

清々しく言い切ったディオネは言うなり、セエレの胸ぐらを掴み上げる。色々なものをすっ飛ばした彼女にセエレは慌てるしか無い。リュシアンやジュリア、ローウエルの散々な扱いのお陰で、ディオネは自分を殴っていいもの、と認識しているらしい。

思わず後ずさるが、満面の笑みを浮かべてディオネが迫る。その数秒後、魔王城にセエレの絶叫が響き渡ったのはまた別のお話。

フェリシアは一人、執務室で書類と睨み合っていた。

だがそれは表面上だけ。彼女の手は止まったまま。先ほどから少しも動いていなかった。

おまけに机の上にはジュリアが運んでくれた紅茶とクッキーが置かれているが、一切手をつけていない。

紅茶は冷めきっており、焼きたてだったクッキーも既にかたくなり始めている。

クロウにも席を外して貰ったため、完全にフェリシア一人だ。アリスティドが気を利かせてくれたため、訪ねて来る者はいなかった。普通ならそれでも油断出来ないリュシアンだが、今日はもう来ないだろう。

ただ自分たちの国を見て欲しい。そう言ったリュシアンに、フェリシアは何も言えず、リュシアンも答えを望まなかった。

一体どうしろと言うのだろう。フェリシアが魔族で、リュシアンが神族なのは、どうやっても変えられないというのに。

「あたしは……」

フェリシアが魔王でなければ、こんな想いを抱くことなどなかったのだろうか。仮定の話など無意味だと分かっている、考えずにはられない。

リュシアンが自分に興味を抱くのは魔王だから？ それとも別の

理由があるのか。確かめることなんて出来なかった。

それでも神王から正式な書状を受け取った以上、決めなければならぬ。そしてフェリシアも魔王として神王の招待を受けることを決めた。

フェリシア個人の気持ちは関係ない。魔王として下した決断だった。

ならば何を迷うことがある。魔王としてなすべきことをなせばいいだけのこと。

リュシアンは嘘をついていることを認めたが、彼もフェリシアと同じではないのか。

彼の意味と使者であることは必ずしも直結しない。そう考えられないか。

「馬鹿みたい……」

そこまで考えて、フェリシアは自嘲気味に笑う。自分はどこまで彼を信じたのだろうか。本当に反吐が出る。自分の馬鹿さ加減に。

良いように利用されているだけではないのか。あの笑顔さえ、偽りだったかもしれない。考えれば考えるほど、疑心暗鬼に陥ってしまう。

「だってリュシアンは何一つ、教えてくれなかったのに」

フェリシアがリュシアンについて知っていることはあまりにも少ない。それなのに信じたいなんて、おかしいのだろう。

せめぎ合う想い。フェリシアとして、魔王として。自分は“どうあるべきなのか。”

先王ならば、迷うことなく、答えを出せたのだろうか。まだ彼に遠く及ばないことは分かっている。分かっているが、思わずにはい

られない。誰もが敬い、力を認めるような王になれば。
何事にも揺らぐことのない心が欲しかった。

フェリシアは思う。先代の魔王ならば、こんな時も迷うことなどなかったのだろうか、と。

フェリシアの前の代、第二十三代魔王は貴族ではなかった。魔術よりも武芸に長けた人物で、平民の出だったのである。

フェリシアに王位を譲ってから気ままに世界を旅しているらしいのだが、今頃何をしているのだろう。

彼はローウエルと同じ人狼族であるが、かなりはっちゃけた人物で、カリスマ性を持っていた。型破りな王であったが、表立って貴族たちに反論させなかったという。フェリシアはまだ未熟で、彼には到底及ばない。

けれど七大貴族出身で、魔力だけなら歴代魔王の中でも随一とされているのに。

「……分かってる。あたしはまだまだ未熟。あなたには到底及ばない。でも、思わずにはいられない。もしあなたが魔王であれば、と」

山のように積み上がった書類。捌いても捌いても一向に減らない。アリスティドならば、フェリシアの数倍の速度でさばけるだろう。

ここにあるのはどうしてもフェリシアが目を通さなければならぬ最低限の書類だ。

『フェリシア』は皆に助けられている。それはとても有難いし、助かっているのだが、どうしても比べてしまう。

今まではそれほど気にしていなかった。自分は自分、彼は彼と。けれど全てリュシアンの子だ。彼がフェリシアの前に現れたから。うじうじ悩むなんて柄ではないし、それならば直接問い質した方が早い。

なのに、出来なかった。何を聞いてもきつと、彼は肝心なことを教えてはくれないだろう。フェリシアの望む答えをくれないだろう。

「あたしが知りたいのは『リュシアン』について。神族の使者についてじゃない」

もし先代なら、リュシアンと渡り合えることが出来ただろうか。きつと出来たはずだ。

一体、自分は何に苛立っているのだろう。きつと不甲斐ない自身とリュシアンに、だ。

「情けない。あたしは『魔王』なのに……」

魔王らしくあらねばならない、そう思うのに心は揺れてばかり。何にしても時間は待つてはくれない。既にスケジュール調整は済んでいるのだから。

『魔王』の仮面をつけてリュシアンと接する。『フェリシア』ではなく。それでいいではないか。そう思うのに何故か釈然としなかった。

神族失格

フェリシアは眩しかった。薄紅色の髪は勿論、二つとない孔雀色の瞳も。神族であるリュシアンより眩しい、と言う訳ではないが、纏う雰囲気だろうか。

フェリシアが『リュシアン』に向ける瞳にはほんの僅かだが、優しさがあった。

神竜王の加護を受けているから何だというのだ。それを言うなら彼女とて魔竜王に愛された者なのだろう。

彼女を見つけたのは偶然だった。神族であることを隠し、訪れた王都でフェリシアを見つけたのだ。『魔王』ではなく、街娘の姿をした彼女を。

フェリシアの孔雀色の瞳はリュシアンが目にしたどんな宝石よりも美しい。

楽しそうに、無邪気に笑うフェリシアに見惚れた、と言えいいのか。何の打算もなく。リュシアンの立場では中々誰かに心を許すことはない。神族といっても野心や敵愾心がないわけではないからだ。

『リュシアン』が心を許せるのはあのソールくらいなものだろう。唯一リュシアンをシアン、と愛称で呼ぶ青年。

ソールⅡライバンという名は、リュシアンが彼に与えたもの。彼を拾ったあの日に。

その名は神族の古い言葉で太陽の光を意味する。彼は自分には過ぎた名だと言うけれど、リュシアンはそう思わない。

フェリシアやソールだけではない。魔王城の面々は個性的で、飽きることはないだろう。

魔王至上主義のメイド長に彼女の尻にしかれている補佐、腕は確かだが何を考えているか分からない料理長や氷の刃を思わせる騎士団長。

自称フェリシアの愛の奴隷といい、若作り、が禁句な吸血鬼の女王など実に個性的で、若干空気の読めない妹とやや苦労性な兄——庭師の双子や神魔の竜娘、頭が万年花畑な騎士も忘れてはならない。彼らと共にいることで、『リュシアン』であれた自分。同胞に囲まれているよりずっと自分らしくあれた。魔王城の彼らはリュシアンにこうしろ、と強要することはない。むしろこんなものだ、と呆れながら納得しているふしがある。

彼ら（魔族）と一緒にいて落ち着くなど、神族失格なのだろうが、リュシアンは聖人などではないのだから。フェリシアと共にいるとリュシアンはリュシアンでいられた。

それでもなすべきことはなすつもりだ。あの仮面をかぶり続けるほかないが、フェリシアの前では『リュシアン』でいたかった。しかし、それを壊したのは他でもない自分自身。大切にしたい、そう思うと同時に自分について知ってほしいと思う。矛盾しているのだろう。

リュシアンはグランミュリンに祈らない。仮にも神族であるリュシアンが神竜王に祈ることすらしないというのは大問題である。

だが『彼女』は祈らなくても応えてくれるのだ。

もし『自分』を見たら彼女はなんと言うだろう。分からない。彼女のことだけが分からなかった。それでもリュシアンは願う。

『どうか……私を受け入れてください』

ディオネは何ともいえない寂しげな表情で、窓からあるものを眺めていた。彼女の視線の先、そこには金の紋章が刻まれた黒塗りの馬車。フェリシアの紋章である蝶の羽根が輝いており、その周りには黒の軍服を纏った騎士たちが騎乗している。

民達が王を一目でも見ようと殺到していた。ディオネや民からも馬車の中は見えないが、中にいるのは勿論、フェリシア。

城下は歓声に包まれており、眺めているだけのディオネも心が踊る。

神王の招待を受けたフェリシアは今日、出発するのだ。ディオネは不本意ながら留守番だった。

リュシアンとソールは親書を携えて既に出発している。セエレやアリスティドたちは城に残っているものの、いつもの賑やかさとはとても感じられない。

フェリシアと共に出発したのはクロウ、エヴァンジェリン、ジュリア、フレディで居残り組はディオネをはじめとしてアリスティド、ローウエル、セエレ、リーフとリースである。

セエレと愛犬エクスカリバーン以外は皆、仕事があるらしく、ディオネに構ってくれない。城下に遊びに行くわけにはいかないし、城には遊んでくれる相手もいなかった。

アリスティドは図書館をすすめてくれたが、生憎小難しい本は読む気にもならない。魔術の手ほどきをしてくれるエヴァンジェリンや、お菓子を作ってくれるジュリアもクロウも留守だ。

アリスティドは忙しすぎて、お菓子を作るどころの話ではないだ

ろう。

「むむむ……暇だ」

遊んでくれそうなセエレとエクスカリバーはどこに行ったか分からないし、かと言って皆に迷惑を掛けるのはディオネとて本意ではない。

しかし退屈はディオネの最大の敵である。考えて考えた末、中庭に出ることにした。エヴァンジェリンに常々言われている魔術の修行だ。

ディオネは魔族と神族の血より生み出された神魔。魔術と神術、双方を扱うことが出来るが、強大な力に振り回されがち。

魔族は幼い頃より強大な魔力を制御する術を学ぶのだが、ディオネは違う。生まれてまだ数年しか経っていない上に、技術面がからつきしなのである。

今まではただ力を使うだけでよかったが、魔王城で暮らすのなら、そうはいかない。制御されていない力はあまりに危険で、暴走の可能性もある。

ディオネの指南を買って出てくれたのはエヴァンジェリンである。見た目は十四、五歳だが、彼女は長い時を生きる偉大なる大吸血鬼。七代貴族の一つアルカード家の前当主で、宮廷魔術士である彼女は魔術士としても非常に優秀だ。

ディオネは魔術や神術を感覚的に使う。そのため、ディオネ自身も“どう”術を扱えばいいか分からないのだ。

極端な話、小さな炎を出そうとして火事になりかけたりと、中々上手く行かない。

エヴァンジェリンは焦るなと言ってくれるが、少しでもフェリシ

アの力になりたいから。

この力を使いこなすことが出来れば、きっとフェリシアの役に立てる。それが自分を暗闇から連れ出してくれた彼女に出来る恩返しだと思う。

中庭へ向かう途中、数人の侍女たちとすれ違ったが、少し元気がないよう。フェリシアたちがいないからだろうか。

彼女たちはディオネを見て頭を下げた。ディオネがフェリシアのそばに知っているのだろう。

中庭には誰もいなかった。本来ならこんな場所で訓練する訳にはいかないが、大規模な術を使わなければ問題ない。

それに精神を集中させるには緑が多い方がいい。落ち着くのだ。かつていた場所も緑に囲まれていたから。

ふう、と息を吐き、精神を集中させる。ディオネ自身は苦手なのだが、エヴァンジェリンに言われて瞑想も続けていた。

魔族や神族は呼吸するように術を使う。ディオネもそこは同じだが、力を引き出し過ぎてしまうのだ。だからこそ、集中して力を調整しなければならなかった。

『夜と混沌を司りし魔竜王ラインハルトよ。我が声と意思に応え、黒き炎を……』

よほど高位の術でなければ詠唱は必要ない。ディオネの場合は精神集中のためと、力をコントロールするために歌う。

要は集中出来ればいいため、必ずしも詠唱である必要はない。気持ちの問題なのだ。

ディオネの手の間に生まれたのは、闇を溶かしたような黒き炎。猛々しく燃え盛るそれは、ディオネの制御を破り、暴れ回ろうとしている。ほんの少し、炎を生み出すだけのつもりだった。

もしここで術が暴発すれば無事では済まないだろう。

魔王城は強力な結界に覆われているが、中からの攻撃では意味がないのだ。少なくとも中庭は無事では済まない。リーフとリースが丹精込めて世話をしているこの庭は。

その刹那、文字通り、世界が凍りついた。

自分の居場所

ディオネの手の中にあつたはずの闇色の炎が一瞬で消えていた。一気に周囲の温度が下がり、吐息が白くなる。ディオネの周りだけが文字通り、凍りついていた。ただディオネだけは何ともない。感じた魔力にディオネの顔が綻ぶ。

「アリス！」

「ディオネ。間一髪でしたね」

ディオネの姿を見た青年が安堵の息をついた。

絹糸のようなフロスティブルーの髪、優しい琥珀色の瞳。纏う衣や繊細な美貌といい、一見すれば女性にしか見えないが、れっきとした男性だ。

彼——アリスティドがディオネに近付いた瞬間、凍りついていた空気が元に戻る。

「大丈夫ですか？」

「うん！」

心配するアリスティドに対し、ディオネは元氣一杯だ。アリスティドはディオネの魔力が膨れ上がったことに気付き、慌てて執務室を抜け出して来たのだった。

ディオネの炎を消したのは、魔術でもなければ精霊術でもない。アリスティドたち雪麗族が持つ力。その力は、吸血鬼の力の源である血さえ凍てつかせるという。

「……ディオネ。貴女が頑張っていることは皆知っています。ですが、今は陛下もエヴァンジェリン様もいらっしゃらないんですよ。もし貴女が力を暴走させてしまったら、陛下は悲しまれるでしょう。それはディオネの望みではありませんよね？」

「う……」

アリスティドに諭され、ディオネは項垂れた。反論など出来るはずがない。全て彼の言う通り。

今はフェリシアも魔術の師であるエヴァンジェリンも不在なのだ。ディオネが力を暴走させれば、フェリシアは悲しむだろう。自分を城に置いてくれている彼女に迷惑もかかる。勿論、それはディオネの望みではない。けれど、

「でも、私は……早く力を使いこなしたい。フェリシアの役に立ちたいんだ。誰にも文句を言わせないように。私は確かに、魔族と神族の血よって生み出された禁忌の存在かもしれない。それでもフェリシアは受け入れてくれた。だから、私もフェリシアに応えたい」

ゆっくりと右手を握ったまま、ディオネは呟く。誰にも文句は言わせない。少なくとも、ディオネが力を使いこなすことが出来れば、文句など言えないだろう。

“ディオネ”は許されない存在なのかもしれない。禁忌の研究により生み出されたいのち。

忌まわしい存在だとしても、フェリシアは受け入れてくれた。だからディオネも、フェリシアに応えたい。

それが嘘偽りないディオネの本心だ。

「ディオネ、貴女の気持ちは皆、分かっています。だから、焦らなくても良いですよ」

ディオネの手にそっと己の手を重ね、アリスティドは微笑んだ。彼女はとても明るくて、フェリシアを何よりも大事に思っている。

『ディオネ』は確かに魔族と神族の血より生み出された存在なのだろう。それでも彼女には心がある。その体も力も全ては作られたもの。

しかし心だけはディオネのものだ。

フェリシアを含めた自分たちはそんなディオネが大好きだった。

口には出さないけれど、ローウェルやクロウだって。ディオネの頑張りや気持ちはちゃんと分かっている。焦る気持ちも分かるが、だからこそ、焦ってはならない。

「アリス……」

「貴女は『ここ』にいてもいいんです。胸を張っていて下さい。貴女が作られた存在だろうと、神魔であろうとディオネはディオネです。エヴァンジェリン様がない間、私でよければ修行にお付き合いさせて頂きますが……」

ただ名を呼ぶことしか出来ないディオネに、アリスティドは優しく微笑みかける。

ディオネの居場所は『ここ』だ。誰が何と言おうと。魔族だとか、神族だとか、そんなことは関係ない。ディオネはディオネなのだから。

「本当か!？」

「ええ。勿論、私で宜しければ、ですが」

「頼む、教えてくれ!」

ディオネはアリスティドの手を取って、ぶんぶんと振り回す。

優秀な魔術師が必ずしも優秀な教育者とは限らないが、エヴァンジェリンは流石は年の功。教え方も上手い。しかし教え方、だけを取ればアリスティドが一番だろう。とてもわかりやすいのだ。

「でも、いいのか？ それでなくても、アリスには色々と教えてもらってるのに」

「構いませんよ。時間を見つけてお付き合いします」

ディオネに一般常識を教えたのはアリスティドである。今も週に一度は彼の授業を受けていた。

多忙を極めるというのに、文句をいう事もなく、優しく丁寧に教えてくれる。そしてディオネが分からなくても根気よく教えてくれるのだ。

「ですが今日はこれで終わりですよ。遊び相手でしたら、セエレさんたちがして下さるようですから」

「うん！」

彼にしては珍しく、悪戯っぽく笑うアリスティドに、ディオネは元氣よく頷いたのだった。

これから神族の国に行くのだと思えば、気分が沈んでくる。

仮にも魔族の王が情けない限りだが、神王との謁見はフェリシアの精神を容赦なく削りとりそうだ。向こうは知らないが、こちらは即位してまだ一年足らず。

神王と渡り合うだけの手腕があると自負するほど、フェリシアは馬鹿ではない。交渉術についてアリストイドから学んではいるものの、流石に相手が神王では些か心もとないだろう。

神王について事前に知ろうとも、情報が全くないのだ。性別どころか名さえも分からない。長らく交流を断っていたのだから仕方がないが、リュシアンやソールに尋ねても無駄だった。

いくら名を明かさないとと言っても、こちらは仮にも魔王一行である。人の名を聞く時にはまず自分から。……少し違う気もするが、神王はフェリシアの名も知っているのだ。

一方的に知られているというのは、あまり気持ちの良いことではない。

「フェリシア。気持ちは分かるが、もう少し肩の力を抜いてはどうじゃ。今からこの調子だと、息が詰まってしまうぞ」

足を組み、優雅に紅茶をすすっているのは人形のように愛らしい少女だ。緩く波打つルビーレッドの髪に、アーモンド型の瞳は魔性を宿すピンクローズ。

外見は十四、五の少女だというのに、その雰囲気はどこか蠱惑的で、成熟した女性を思わせた。

宝石を縫いつけた黒いローブには金糸銀糸で薔薇の刺繍が施されており、襟ぐりが大きく開いている。

陶磁器のように滑らかな首元を彩るのは血の如く鮮やかな宝石。

ビジョン・ブラッド、と呼ばれる最高級のルビーだろう。

「分かってる。でも……」

「神王については分からぬことが多い。しかし余計な情報は時に判断を鈍らせるぞ。未熟な王なら尚更のう」

「うっ……」

馬車の中とは言え、殆ど振動は感じられない。

快適な旅であるのは有難いのだが、気持ちだけはどうにもならなかった。間延びした、だが有無を言わさぬエヴァンジェリンの声にフェリシアは俯くしか無い。

「うむ。やはりジュリアがくれた紅茶は最高よの」

「恐れ入ります。フェリシア様も宜しければお召し上がり下さい」

ふわり、と良い薔薇の香りがしたかと思うと、目の前のテーブルにティーカップが置かれた。二人の給仕は勿論、ジュリアである。

顔を上げれば柔らかな微笑むジュリアと目が合う。その笑みを見るだけで、元気になれる気がした。『フェリシア』は本当に沢山の
人に支えられているのだ。

「……ありがとう。頂く」

「はい」

そんな主従を見たエヴァンジェリンは小さく微笑んで、再び紅茶を口に含んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792x/>

月色ラブソディ

2012年1月12日20時01分発行